

郎路生麻 幹主

# 川柳新誌

號 月 二

正十三年三月三日第三種郵便物認可  
正十三年二月一日發行每月一回一日發行

川柳雜誌 第五卷第二號 川柳雜誌社發行



喜田川守貞著  
原名守貞漫稿

(內容見本進呈)

# 聚頰近世風俗志

菊版千二百七十餘頁 天金總クローヌ

箱入特製 極美裝

定價金七圓五十錢  
內地郵送料二十四錢

一、本書は先年東京帝國圖書館に於て非常なる高價を以つて買ひ上げられたる書にして同館貴重書中の一たり。明治四十年一度發刊以來絶版となり以來多數の本書要求者に甚だ不自由を與へしものにして、今回こゝに一層の重版を希はれ再び發行の道へと進みこゝに再び全く改版整ひ、挿繪も昔のまゝ豊富に入れたり。

二、守貞漫稿と云ふ故喜田川季莊の筆になつて、其の載也たる所の編目は、先づ時勢地理、人事家宅、生業通貨に起し、男女の扮粧、服裝染織の變遷、華街嬌斜の風情、歌舞音曲、梳木傘履、四季の慣例、日用の雜具、童謡遊戲車駕等に至るまで、恰く當時の社會の狀態を寫し來つて、全版三十餘卷に及べり、殊に立化文政以後の情況を叙すること頗る詳細を極む。蓋しこれ著者深意の存する所こゝにあらむ。

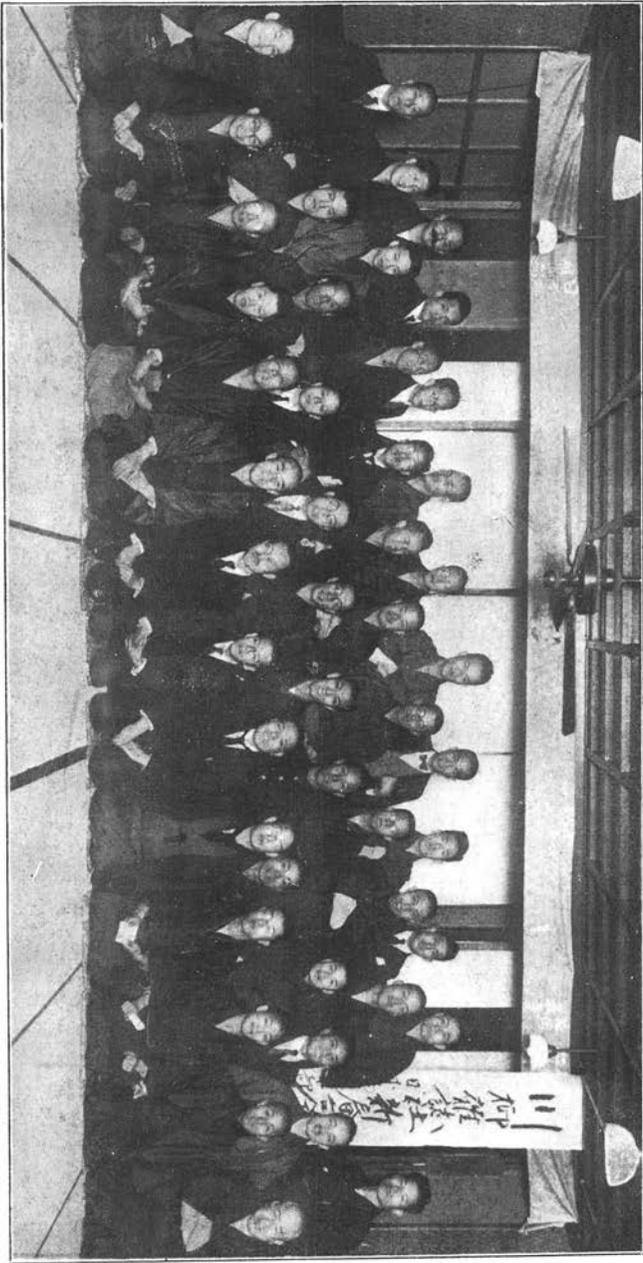
發行所

(出版目錄進呈) (郵券二錢送附の事)

東京市淺草區瓦町十番地  
邊替口座東京七二七九三番  
電話淺草四七一七番

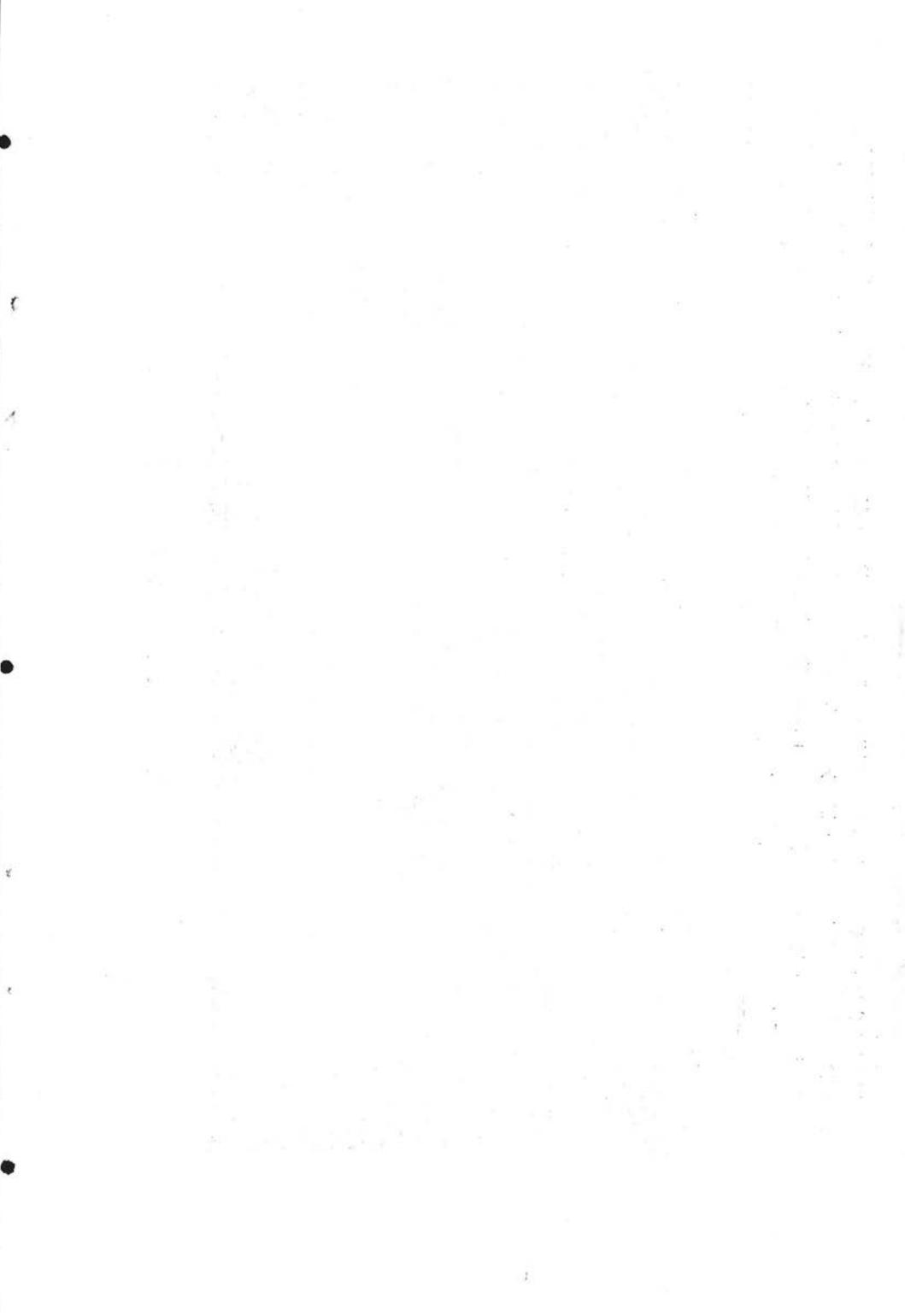
榎本書房

# 會 旬 春 新 社 本



【明説眞寯】

じい 萬・太紋・耶路・ヲ柳・じろひ・笑三・秋影・風秋・水秋・卓・り；右(つ向(列一第)  
 期吉・竹二・行馬・耶松・坊坂・敢乱・踏園・川翠・泉幸・紫十(列二第) 樓雨山・耶梧・人琴・るほか  
 子柳二・仙翠・子山松・林楓・香幽・亭迷・柳九・南二・水新・亭喜陽・舟孤・平泰(列三第)・蝶文  
 (原攝新報山崎本日於 夜日八月一年三和昭) 白蘆・二踏・二蝶・三木・水二・骨柳・馬放・耶萃・香加・峰翠(列四第)



▼ 本社二月例会

▼ 日時 二月七日午後六時  
▼ 場所 南區清水町電停西入北側  
「端の坊」

▼ 兼題 「資本家」三句  
▼ 會費 二十錢  
初心者の來會を大いに歓迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため、全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のため、眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は、本社宣傳部へ支部設置希望の旨申込まれたい

川柳家の戸籍調べ

□ 係 ひろし生  
(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八) 好きなタイプ of 女 (九) 自信の句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 擔ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

お馴染の戸籍調べを引きつゞき、掲載致します。御照會申した向きは左記へ御返事下さい。  
大阪市南區安堂寺橋西詰 安井寛宛

川柳雜誌 第五卷第二號 目次

感想・評論

知十翁柳俳無差別觀  
記 憶 錄 竹馬居主人  
ふろふき 安川久流美  
誤解小惑 岩本素人  
初心者の迷路 庄萬よし  
「時代川柳大觀に就て」 松盛琴人  
を讀みて 八木毒仙

研究・其他

川柳の漫談「タラ」 川上三太郎  
「大山みやげ」を讀みて 西原柳雨  
川柳の本質 (二) 田中辰二  
漫詩さばしり集 長野晴濱  
川柳人の一生 柴野舟郎  
漫畫 評 路 評  
古句質疑 蛭子省二  
月 評 春三、山雨樓

▲ 募 集 句

父 篠原春雨選  
素 人 楳元紋太選  
定 宿 福出山雨樓共選  
本社新春句會 橋本二柳子記  
各地柳壇・

閑日(表紙)  
題字  
編輯室から

川柳塔 創作

松盛琴人 三好革郎  
矢田右大臣 酒井駒人  
北山悟郎 高橋かほる  
西山三笑 庄萬よし  
横田眠聲 岩本素人  
橋本二柳子  
松丘町二  
長谷川徹  
鳥田翠峰  
中見光路  
水谷鮎美  
猪野燕柳  
宮本銀砂子  
粒々集  
塚崎松郎  
青砥不二綱  
長崎柳秀  
中野柳陽  
堀内静雲  
石川双葉  
畑田炭車  
朝田新水  
安西杏三  
澤濁水  
中野柳陽

吉田喜興志  
小出樽重  
本社新春句會  
路那・革郎



# 近作柳樽

路郎

選

父に似て酒など呑むな男の子  
 病上り水白粉ですましき  
 白粉をつける暮しでないのなり  
 苦勞なら一緒にするさぬかしたり  
 白粉が無くてはならぬ日を送り  
 うつむこう浮世とやらのむすかしさ  
 白粉は氣分のまゝに塗られたり  
 軽く病みマンドリンなき弾いてゐる  
 十二月半ばの俺の影長し  
 辭める氣かもう上役に逆らはす  
 情熱を云ひく橋を越へて來る  
 初戀は林檎むく手のつやゝかさ  
 捨てた女の事ばかり聞く  
 戀人の言ふた通りを父母に云ひ  
 貴方さもあるうお方が獨身か  
 酔ふてゐたのかお辭儀ばかりし  
 逢ふて來たのに母寒からうく  
 勤めから戻れば猫がもろてあり

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 廣

阪

島

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 露

多

喜

女

斗



貧乏も知つてか子供死んで出来  
 頼まれもせぬにいゝのを搜して  
 さまよへば窓の灯りのなつかしく  
 レシーバーが寝間へ届いただけの孝  
 才藏の樂もらひに太夫行き  
 人間の寒さも知らず家鴨浮き  
 縛られてからも彼奴に惚れて居る  
 猫ぶつた旦那それから嫌やがられ  
 ビルディング何か捨てたい氣の高さ  
 辨當箱雑誌の表紙チトぬくし  
 生花の歸り電車の隅へ乗り  
 又別な看護婦に兒はあやされる  
 裁板の隅で宿題やつこ出来  
 いろは順ですこ社長へ恐れ入り  
 すき焼の湯氣の向ふに冬が見へ  
 お得意へおいさを向けた東西屋  
 不景氣を子供に話す寒い晩  
 窓へ来るくせに歌集を持つてゐる  
 ストーヴよお前ばかりが温かい  
 すき髪をして新町に居たと云ふ  
 氣遣ひの話看護婦夜を更かし  
 色紙に母をなくした淋しい子  
 何うしてるかを蛇の目傘見にも来る  
 心まで任せきつてる電車なり

大 同 同 同 同 大 同 同 同 同 大 同 同 同 同 東 同 同 同 同 同 同 大  
 阪 阪 阪 京 阪

さ 同 同 同 同 冷 同 同 同 同 其 同 同 同 同 鳴 同 同 同 同 同 同 毒  
 舟 笑 象 堂 仙



隣人ミ語らぬ程にひがんでる  
 鞆妓から洩れてみんなに贅らされ  
 よい中をみんな知らずに呑んでる  
 錠前に彼女不在に知らせたり  
 電柱の高さも秋のものさなる  
 さみしさを男は云ふてゐたつもり  
 下駄なぎを洗ふて居れば女が通る  
 石投げの子を見て居ればたそがれる  
 頼むこまばかりだつた五十年  
 おろかにも芭蕉の皮の厚いこと

十一月六日妹の死(二句)

見返れば妹にあらずよその娘よ  
 十姉妹いづれ何かの足しにされ  
 信心で合すその掌の細つて來  
 葬式の入夫で食へる道も有り  
 惱しき香の様に春のもの  
 未亡人支那服を着る氣にもなり  
 糸二本釦の命つながられて  
 萬よしで時々痛いこまを聞き  
 ムツッリーニと父さ比べて見る日あり  
 神に意のあるかやうに神輿すね  
 夜明けの灯まだついてゐて馬鹿のよう  
 意地が汚なくて旦那に見込まれる  
 本ネルを捲いて板場の證據にし

同 同 同 山 同 同 同 同 魚 同 同 同 同 池 同 同 同 同 神 同 同 同 同

口 崎 田 戸

同 同 同 さ 同 同 同 同 亂 同 同 同 同 白 同 同 同 同 鎌 同 同 同 同

ん 勝 耽 蝶 月



強意見母ばかりに答へさせ  
 氣違ひさ紙一枚のころなり  
 拐帯の故郷に似たる窓の景  
 語りまする太夫は鼻をかんでる  
 妹が來てから煙草よく賣れて  
 鹽昆布の話眞晝の女風呂  
 日曜日父さ出る子を送り出し  
 癒わし子を抱いて嬉しう空を見る  
 わびしくも落合ふた夜の莫産枕  
 涙湧くまんまに墨は濃くなりぬ  
 空涙でも喜べり未亡人  
 無口者自分の事にしてなやみ  
 貞操の假面を金の前に脱ぎ  
 壁のきず小さい時の噂さが出  
 バスケツト一番上に岩おこし  
 A B C 聲ものさかな春になり  
 大根を抜けば蟬が死んでゐる  
 戦場のやうな打鼓で冬に入り  
 堂島の失敗ださは言へぬなり  
 志士少し瘡せて都の宿へ着き  
 蓮華草持つて歸るさ塵になり  
 代筆は孝行な子を聞き飽きる  
 眞剣な顔に今更笑はれず  
 永からぬ命さ知つて改心し

同 同 同 盤ヶ池 同 同 同 島 同 同 同 魚 同 同 同 山 同 同 同 尼 同 同 大 同  
 五 同 同 同 崎 同 同 同 崎 同 同 同 阪

同 同 同 刀 同 同 同 綠 同 同 同 愚 同 同 同 白 同 同 同 吟 同 同 十 同  
 同 同 同 四 同 同 同 之 同 同 同 陀 同 同 同 女 同 同 紫  
 同 同 同 郎 同 同 同 助 同 同 同 陀 同 同 同 女 同 同 紫



エキストラもうやれさうな氣にもなり  
 同郷と聞いて二人は酒になり  
 三人の一人ほんやり耳をかき  
 其の意地が形ミなつたビルディング  
 再婚もしたし恩給もほしいなり  
 さう聞けばダイヤモンドに相違なし  
 取らば取れ注連縄取も子供なら  
 寶惠籠は無人の境を行く如し  
 賣出しを見て居る藝妓撥を持ち  
 笑ふので姉妹仲の良さが知れ  
 待たされて居ましたよ共同便所  
 續く不幸世間のせまき子を抱き  
 失意して一農夫にて暮したく  
 敷石へ名刺冷たく落ちて留守  
 洋服へ表現させた音楽師  
 お嫁入しまひに安來節も出る  
 私儀なごさ缺席書くつらさ  
 當直の先生にピアノ鳴つてゐる  
 追ひつめたミこで鶏肩を越し  
 名物を買ふ時街の灯がごもり  
 朝風呂で石炭すくふ音をき  
 辭職して手持無沙汰な松の内  
 俺につれ何時しか妻も吃り出し  
 我子なら直ぐにも叱りたい養子

同 同 鳥 同 同 神 同 同 大 同 同 長 同 同 和 同 同 大 同 同 大 同 同 大 同 同 姫  
 取 戸 阪 春 歌 山 阪 阪 島

同 同 聽 同 同 志 同 同 よ 同 同 我 同 同 玉 同 同 大 同 同 大 同 同 蒼 同 同 觀  
 松 郎 江 し 卵 童 仙 夢 子 梧 樓 月





病めば輕さうな布團に母は困る也  
 バリカンを持つて日向にうつむかせ  
 薄々は母も女を知つてゐる  
 しすくも出てもう高座笑はれる  
 俵給日炊事手袋買ふて來る  
 面當てのやうにせはしい茶漬なり  
 旅支度ミ、のへて寢る大晦日  
 子が去んで蜜柑一つが落ちてゐる  
 葬式の出るにコスモス咲いて居る  
 なんほでも降れさ宿直打つてゐる  
 家族並にしても女中の氣に入らず  
 獵銃に濟まないやうな鴨を買ひ  
 硬骨で鳴らした叔父の靴の穴  
 代表は玄關へ來て躓づき  
 重惡さ言ふのにごろく子を産ませ  
 停車場の雀眼ばかり光るなり  
 買ふてやるつもりが先に覗くなり  
 煙草盆パットに過ぎる手入れにて  
 尤もな事にして置く苦勞人  
 染物屋年に合した柄を見せ  
 可愛ゆさに芝をすべらし叱られる  
 珍容の毛皮へ小僧頼摺りし  
 學問があつて娼妓になれぬさう  
 父逝いて去年のまんまの菊が咲き

大 同 大 同 神 同 大 同 安 同 函 同 大 同 尼 同 香 同 住 同 同 同 大  
 阪 阪 戸 阪 東 館 阪 崎 里 吉 阪

八

石 同 青 同 武 同 武 同 二 同 源 同 里 同 花 同 梢 同 水 同 曼 同 伴 同  
 竹 子 坊 子 藏 子 坊 水 坊 魚 蝶 雨 火 平 内



したゝりに一列ゆがむ登山隊  
 たまさかの丸い心に近寄せず  
 秋晴れて嘘ばつかりの詩が出来る  
 泥棒も同じ時刻へ拾ふ夢

病床吟

端唄なご口ずさむ氣も朝の頃  
 コゲ飯をすきですからご喰ふも嫁  
 よろひびつ倉の匂ひのまゝ置かれ  
 安心をして附添は髪を結び  
 箱庭も冬のさびればのがれ得ず  
 値切られるものご植木屋肚をきめ  
 紋所正しくやつと生きて居り  
 負けたのが火鉢の火をば淋しがり  
 いゝご云ふ事はしたがご忌中罷  
 あんなにもなつて柱のもちこたえ  
 銀行へ這入つたらし子は拾ひ  
 橋向ひいつ焼けたのか知らなんだ  
 云ふごを半分云ふた許嫁  
 缺席の隣りに寒く坐るなり  
 明けがたに旅の寢床と心付き  
 佛壇の中へ親しむ聲をかけ  
 銀行が開かなきや今年も欠禮か  
 芝居から歸りは雪の道になり  
 親類のやうに役者の事を云ひ

佐世保  
 同 岡  
 同 福岡  
 同 別府  
 同 長春  
 同 大坂  
 同 石川  
 同 鳥取  
 同 大坂  
 同 神戶  
 同 大坂  
 同 兵庫  
 同 不庫  
 同 京明城  
 同 堺

佳  
 同 無  
 同 晃  
 同 箱八  
 同 籬  
 同 水聲  
 同 穂波子  
 同 漫酒樓  
 同 二南  
 同 汀柳  
 同 珍郎  
 同 戀香  
 同 風鈴  
 同 太路





漫川柳的「タラ」(一)

川上三太郎

これは舊臘廿三日午後七時廿五分からJ O A Kで放送したもので、その目的は川柳家以外の人たちに川柳さ  
いふものを知つて貰ふ事さ、川柳的漫談さいふ一種獨特の型を創つて見たいと思つてやつたのである。放送  
後割合に評判がよかつたので自分も悦んでゐる。今度關西の方にも聞いて貰ひたいと思ひ、もう一度放送す  
る心算で一氣に書き下して見た。文中重言、片言、國訛があつたら、それはみんな小生の舌の廻らぬ不憫さ  
からである。幸ひに御判讀をたまへ。

川柳せんりゅうとはぎんなものかーそれは今いまからもう三十分許りさんじふぶんごほり経ち  
ますよ、つまり八時五分前はつじごぶんぜん頃になりますよ、ハ、アそんなもの  
かいーお判りはんりになりますよ。さうでそれがお判りはんりになりま  
したならば、私は皆みな様に、早速さつそく川柳をおつくりになつて頂き度  
いのであります、是非ぜひともお奨めすすするのであります。けれども  
だいぬげにさう申まう上げましたさうで、それには何かその材

料りょう、つまり川柳の題材だいざいさいふものがありませぬ、さうしたら  
いゝのかさつぱり見當けんあたがつきませぬ。茲こゝに川柳的漫談「タラ」  
ーは此の意味こゝに於おきまして、私わたしから皆さまに差し上げる材料ざいりょう  
であります。題材だいざいであります。さうぞ皆さまは此の中から、自  
由じゆうに自在じざいに材料ざいりょうを御見ごみつけ下さいまして、早速さつそく川柳をおつくり  
になつて頂き度たいと思ふのであります。さうで一體たい此の材料ざいりょう

ごか題材なきに申しますものは、殊更に私から皆様に差し上げませんでも、到る處に何處にでもゴロ〜轉がつてゐるものでありまして、決して珍らしいものでも、貴いものでもないのであります。けれども、我々がうつつかりして居ります爲めに、その儘それを逃がして仕舞ふ事が多いのであります。でありますから川柳をおつくりになる場合に、此のうつつかりしてゐるこいふ事は何よりの禁物なのであります。もつこも敢て川柳に限らず、世の中の事は何でもうつつかりしてゐては不可ません。たゞへばいらい、月の晩だから言つて、うつつかり往來なぞを歩いて居りますと、此の頃の東京の地面は、無暗に穴が明いて居りますから、我々は一日おき位に穴ボコの中へ落つこつて居なければなりません。又昨今の外國電報を見ますと、歐洲では殊の外寒さが厳しい爲めに、往來がまるで板か鏡のやうにツル〜に凍つて仕舞ひ、倫敦などはそれが爲めに凍つて轉んで大怪我をし、病院へ入院した者だけでも一日に千五百人からあるさうであります。若しこれをうつつかり歩いて居たならば、倫敦中の人人は、みんな腦震盪を起して、恰々花川戸の助六のやうに洋服鉢巻をして歩いて居なければならぬのであります。要するに時代は益々忙がしくなる許りで、さてもうつつかりなぞしては居られません。ところが元來生れつき、ハキな私の如き人間は、始終まごごにうつつかりがちでありまして、たゞへばく

リスマスが目睫の間に迫つて來ましても、は、ア今夜は七面鳥が頸ツ玉へリボンをつけて、人間に食はれて仕舞ふ日だナー！位にしが感じません。一陽來復、お正月になりまして、甲斐なく立たん名こそ惜しけれ、加留多を取る美しい、樂しさうな聲が春の融を流れましたも、J・O・A・Kのアナウンサーのかたから「それでは皆さん、お休みなさいませ。」

言はれますと、よくその御命令を遵守致しまして、たゞへさんなにお隣で大きな聲で笑つて居りまして、極めて從順にコロリと横になつて、その儘眠つて仕舞ふのであります。つまり一年の間に大晦日とお正月が隣り合つて居るのは、料理屋の隣に耶穌の教會があり、ダンスホールの隣にお神樂堂があり繪描きの隣にペンキ屋が住んで居るやうなもので、たゞもうほんの何かの拍子で、隣り合つてゐるに過ぎない位にしか、實は思つて居なかつたのであります。ところが此の年末は何時もの年の暮は途ひまして、私にまつては極めて妙な、ヘンテナ、奇怪極まる年末でありました。それは昨日の夕暮の事でありました。私は何時もの通り風呂へ行きました、好い心持に首を浮かせて、ブラ〜家へ歸り、ヒヨイミ座敷へ入りかけますと、先刻錢湯へ行く時まで、いつぞ見た事もなかつた、それは三尺七八寸もあらうか、さいふ大きな細長いタラが一尾。何時も電燈の紐を吊す天井からぶらり、ミブラ下つて居るのであります。

す元來あの鰯こいふ魚は、餘り愛嬌のある魚ではありません。頗る消極的な、そして益々衰れつほく、恰度炬燵を取り上げられたおぢいさんみたいな顔をしてゐるまごに情けない魚であります。私の家にブラ下つてゐるタラもまごにその通りであります。いや、それが細長く偉大であるだけに却つて一層消極的で、且つ益々衰れつほく、さうして愈々炬燵を取り上げられたおぢいさんみたいな顔をして居りました。私は思はずギョツミしました。然しなほ薄氣味の悪いこごには、そのブラ下つてゐるタラの尻尾のスレ／＼の疊の上に、何だか薄べつたものが置いてあるのです。

「はてな、何だらう」

私は怖々手に取り上げて見ますと、それは一冊の汚らしい手帳でした。中を見やうとしますと、中は嚴重に封がしてありまして開きません。たゞ間から一枚の紙片がフワリ落ちたので、見る

——お留守中済みません。貴下は二十三日にラヂオの放送をなさるさうですが、さうかその時此の手帳を朗讀して下さい。但しそれ迄此の封を切らずに置いて下さい。尙甚だ粗品ですが、お歳暮のおしるしまでに……としてありました。なるほごタラを見ます。

ご、タラは彼のアタマへ「粗品」を書いた紙片を貼りつけられ

た儘、悄然ブラ下つてゐるのであります。私はこれでも随分長い間東京に居るのですが、人間が少し足りないせいか、未だに東京には一人の友だちもなければ、知人もありません。元より親戚とか親類とかいふものなごは始めからない、本當の一人者なのでありますから、従つて私の方から年末の挨拶に出かけるまごころもない代りには向ふから

「おい、ごうだい、此の暮は？」

なき／＼やつて来る篤志家もないのであります。それが私の留守の間に、誰か来て斯んな大きな細長いタラミ、斯んな薄汚ない妙な手帖を置いて行つたのですから、私は暫くの間、呆然として居たのであります。然し要するに此の「粗品」なるものがブラ下つてゐる意味は、

「お前」に此の大きな細長いタラを一尾やるぜ。その代り此の手帖を頼むぜ——」

こいふ意味に違ひありません。私はマア頼まれればその位の事はしてもいゝと思ひました。殊に斯んな大きな細長いタラなんかを擔ぎ込んで来たその努力ミ、熱心に對しても、これは此の手帳を朗讀した方がいゝと思ひました。實は今夜その手帳を只今から時間の許す限り朗讀しやうと思ふのであります。封を切りました。中は大きな字で書いてありますから、多分今直終らうと思ひます。では暫く皆さまのお耳を拜借致します。

——吾輩は泥棒である（手帳の一番始めに吾輩は泥棒である  
と書いてあります。これは泥棒の手帳でありました。但し泥  
棒にしては頗る四角張つた泥棒で、それに夏目さんの猫にカ  
ブれてゐるさ見へまして、吾輩なんて言つて居ります）——  
吾輩は泥棒である。そこで廿三日即ち本日午後五時から、  
去るところで泥棒の忘年會がある。その泥棒の忘年會で吾輩  
は一場の講演をするこゝになつてゐる。以下はその演説の草  
稿である。演説のあとで餘興としてめい／＼泥棒の實演があ  
る。これは是非入場料を取つて、來年から一般に公開する心  
算である。さて吾輩の演説の大要は先づ次のやうなものであ  
る。

### 演題 「泥棒と節穴」

諸君、吾輩は今夕此の泥棒の忘年會の席上に於て、「泥棒と  
節穴」と題し、聊かその所感を述ぶる光榮を有するものであ  
る。さて泥棒も亦普通の人間と同じく、終始經濟的原則に従  
つて行動する動物の一種であるから、矢張り常に最小なる勞  
力を以て、最大なる効果を收むる事を、その理想としなければ  
ならぬ。従つてこれと反對なる行動即ち最大の勞力を提供  
しても、最小の効果しか擧がらない行動は、絶対に避けなけ  
ればならないのである。たゞへば諸君が往々途上で散見する

であらうところの、電車に故障等が突發した場合、大勢の車  
掌や運轉手が一生懸命、青筋を立て、その故障車の後押しを  
して居るが如き、最大の勞力を以て、最小の効果しか擧らぬ  
行動を、我々泥棒から見るとは、まことに價値に耐へないの  
である。滑稽といはなければならぬ。即ち我々泥棒は何時  
如何なる場合に於ても、常にその勞力は最小、然もその効果  
は最大といふ事をば決して忘れてはならないのである。であ  
るから萬一我々泥棒が深夜その能力を發揮する際、階下の簞  
笥の上にダイヤの指輪が置き忘れてある事を熟知しながら、  
二階の押入から花色木綿の夜具を背負いだす者があつたら  
ば、それは正に泥棒の故障車である。完全なる泥棒ではない  
完全なる泥棒は、何時も勞力の最小である事を條件としてゐ  
るのである。此の意味に於て我々泥棒はかの怠り者といふ人  
種と頗るよく似て居るのである。然しながらこれは飽くまで  
似て居るさいふだけの話で、決して同一の人間種ではない。等  
しい價値はつかないのである。何故かと言へば  
泥棒は絶対に怠り者から物を望まれる憂ひはないが  
怠り者はしばしば泥棒に物を望まれるからである。つまり  
これを川柳で言へば

懐ろ手花が咲かうが咲くまいか

紅太郎

こいふのは忘れ者であるが、これが泥棒の方になるこ

### 懐ろ手今日も留守だと見て通り

小葉

即ち怠り者は總して就いて無關心であるが、泥棒の方は同じ懐ろ手をして歩いてゐても、始終所謂最小の勢力を以て、最大の効果の擧りさうな家を物色して居るのである。即ち絶へず節穴があれば節穴から覗き込み格子が開いて居れば直に首を突込んで眼の玉を光らせるのである。さうして始終油断をしてゐる家、不注意な家庭を探してゐるのである。殊に昨今のやうな

### 一年を賣詰めたやうな十二月

維想樓

こいふその賣詰めた十二月、それも押し詰つた此の頃になるこ、即ち男はみんな如何にして金をつくるべきか血眼になり、女は又その金を如何に使ふべきか夢中になつてゐる最中であるから、何うしても油断が多い。不注意だらけである此の油断之際を狙ふのが我々泥棒の本領である。得意である就中玄關や土間に膠物が亂雑に脱ぎ棄てゝある家庭の如きは一見してその不注意さ、油断の程を窺はれて、我々泥棒の最もよいお得意様こいはなければならぬ。

### 新家庭今日は草履で出たくなり

木星

こ彼方の下駄を突かけたり、此方の草履を履いたりして、一體不景氣こいふは何んな花が咲く樹だらうなんていふやうな顔をして、銀ブラをしたり活動の同伴席で納まつてゐる新婚夫婦の家庭などは、まことに我々泥棒にまつてはお説らへ向きであり、持つて來いの家である。これは要するに餘りに悦びに溢れて、彼等の生活が油断がちであるからである。

### 一茶の句

梅折るや盗みまするこ大聲に  
小坊主が棒を引ても吉書かな  
能因が腹肥したる雑煮かな  
永の日を喰ふや喰はずの池の龜  
春雨や御殿女中の買喰ひ  
居並んでたるまも雛の仲間かな  
もたいなや花の日永を身にこまる  
やき米を粉にしてすゝる果報かな  
追従に鳴子引くなりものもらひ  
どごを風吹くかミ寝たるやもめ此  
づぶ濡の大名を見る炬燵かな  
子寶がきやらく笑ふ櫛火かな  
貧乏らしこいひく火桶抱にけり



# 幻怪坊氏の「大山みやげ」を讀みて

西原柳雨

正月十四日始、坊君から同書を拜借して一讀し、先づ澤山の句を拾録せられたことに感服し、次に多くの難句に明解を與へられた事を多とするのである、恰も『川柳風俗志』の上巻は大略脱稿して居た處であつたが、此好著に接して兼ての疑義を氷解したるもの少からず、印を除却したるもの二三句、更に左の二十句を抜抄追記したことを御許しあらんことを御願する。

親分の病氣に鈴を五つ借り  
五つの語は不明ながら  
親分の病氣千垢離はれるやう  
氣の毒はさしと拔身で五六人  
よくさしと流れまじと子分來る  
なげるさし十九本目に土左衛門  
百度目のさしは目よりも高く上げ

なんにきくもんだ間男垢離を取り川垢離を拾つてはさす舟ばくち  
大山は千こり成田十六里  
萬年屋近所拔身の客を待ち  
初山へ半の角文字納め太刀  
牛の角文字即ち「いひ」の一番「いひ」意を推定して

大太刀の山で真柄の物語  
二十八丁上に居ていひ延べる  
雨降山曇つた身には登られず  
真向に太刀をかざして懺悔也  
親分はまんがなをつて山へたちき  
小天狗ふしやうぶとやうの口つち  
此句は川垢離の所へ置く方が適當として  
石尊は無禮ななりで拜む神  
御師で行衣を借る云々の解説あれども、  
私は只裸体の御振りの姿として、  
上總嫁大山土産さしてゐる  
上總嫁の上五の説明は不充分と思ひながら  
仲條は山のあれたでこりくし  
富士にも通用出来る句として

次に私の蒐集してゐる句で、同書に登載してないものも多少あるやうですから、御參考迄に左に列記しておきます。

川垢離の願主押へて禮をのべ(昭和)  
水臭い奴が着物の番をす(安永)  
藤澤の下卑一ト盛直を上げる(天明)  
親分は真柄のやうに擔ぎ出し(天明)  
吉廣の作で盆前切りぬける(文化)  
十四日拔身をなすよつて旅をする(天明)  
十四日油断をするさ山へぬけ(安永)  
路地の鍵借り石尊へ日着なり(天明)  
いら高で親分聲を張上げる(安永)  
親分と連立つて行く初(安永)  
大瀧であの女房、この女房(安永)  
間男の沙汰を天狗も聞き飽きる(天明)  
どうしたか山歸以後人のよ(安永)  
明珠は三郎坊に中(安永)  
野郎の天狗は小供に取巻かれ(安永)  
この句が不明のまゝ、  
盆山は火水を見せる不動尊(???)  
投げ込んでくんな頼む女(明和)  
「才三に文こさづける轉婆下女(寶)」の類句とも取れるけれど

親分の女房不動に待つてゐる(安永) 親分の四手に乗るは山が入り也(安永) もう二里にして、太刀を汚す(安永) 夫から同書に示しある解説を聊か意見を異にするものを二三提出して見たいと思ふ、是は研究上の事として失禮の段は幾重にも御寛恕を拜願して置く、

千垢離に一人殖ゆるは吉事也 原解に看病人が病人の容態かよいので去つて川垢離の仲間人をするやうに説いてあるけれども、私は次の「生れたる橋の上から呼ばるなり」の類句にして、出産を解して居た。

千垢離の淡雪と出る不吉也 是もその次に掲げてある「千垢離で凍る雪であつたり」の類句にて、川垢離を取つて淡雪豆腐屋へ這入るは消ゆるといふに思ひ當つて不吉であるこの義かと思ふ。

井戸端で浴るはへんの變つたの石尊への祈願に限定せず、金毘羅様でも水大宮様でも唯神佛への水垢離と取れるので、私は此章内に加へぬこゝにしてゐるが如何なものでせうか、

宿帳をつけるご山の客はなし 私は此句を弊著「川柳吉原志」の品川の條下に入れて居るが、本書にあるのを見

て非常に疑を惹起した、自分の方を直に抹殺せんかとも思つたけれど、此書の解もまだ少し徹底せぬやうにもある、各位の明解に従ひたし

亂髪で義廣をほつこんで行き 借金よりであることは云ふ迄もないであれども、罰鬢は借金よけのみに限らざるべければ、その一節は贅文ではあるまいかと思ふ。

石尊は俄におもひ立つ所 参宮や上方見物のやうに日数を要せぬから無造作に思ひ立つたあれども、私は矢張り益に差掛つて俄に思ひ立つた方が適切なやうに思ふ。

いひ延べて置きやと踏込込出る 私は此句を大晦日に列してゐるが、唯これ丈で借金のがれの石尊と必定してよいから少し疑念を生じたのである。

石尊は上げ壺しても氣にかゝり 私も不明であつたが、上げ壺さはいかさまの采を用ゐて賭博に勝つことある柳友に教へられた、夫にて充分に句解は出来るやうにある。

切つ先で夢はら笠の直をつける の笠は笠にしたの二両方とも見たと思ふが一體さらが正しきか各位の御調を乞ふ百貫のかたへ夢はら笠一つ 勿論俚諺の利かせであることは云ふ迄もないが、茲での百貫は裸の意ではなからうかとも思つて見た。次の數句は今少し説明を乞ひたきもの、そして自分には發表する丈の意見を有せざるもの、 美しいさは流れぬ投げ所 一體此句の措字及び文法上の點が具合が一向解らぬ、意味は確に原解の通りならんと思へば、 せんごりの仕舞は水に伊達があり 水の大きく波紋を描くことを伊達があるといふとあれども、今一息の御説明を乞はねば腑に落ちぬ。

千垢離を四五匹飼へし御意なされ 橋上から見た幼少の若殿がお附の人へあの威勢のよい千垢離を四五匹飼へしはれたさあるも、その意味が解らぬ、何故に特に匹といはれるか、 義弘の太刀が怖いと姐妃いひ 姐妃を直に狐馮の別名させられたやうなれど、腑に落ちぬ、夫では玉藻いひとしてもよき譯、その點に疑が取れぬ。



# 川柳の本質 (二)

田中辰二

此の明らさ、淡さ、軽さは川柳の重大な基調となつてゐるけれど、それだけでは他の江戸文學に川柳さ比肩し得るものもあらう。我々は川柳を本質的に見て明らさ淡さ輕さを持たつて展開してゐる滑稽感を感じる事は出来ない。此の滑稽感か明らさ淡さ、輕さの上に盛られて、而もそれが最短詩型の中に容易に收められてゐるうまさは川柳以外に求めて求め得難くは無いだらうか。私は川柳がすくなくもわが國文學の中で獨特な文學であるのみならず全世界に通じし唯一つの勝れた民衆の笑ひの文學であるを信じたいのである。

笑ひも其の特質から云へば、又形式や段階から云へば様々にわからやうである。川柳に含まれた笑ひも亦多様にわかれる事は當然である。併し表現の上から觀るに極く大づかみに二つに分ち得よう。

それは重大なる基調の明らさ淡さ輕さの上にもり上つて來る自然の笑ひと、作爲的な技巧的な表現から起つて來る笑ひとである、花嫁の句を拾つて見よう。

- 片まみへ落すこ娘は手でふさぎ (柳樽拾遺、明和)
- ほそながく脚の湯漬の音がする (同)
- 湯殿から忘れた時分嫁は出る (同)
- 追ひ出されましたご母へそつこ云ひ (同)
- 張物に嫁はむすばぬ頬かぶり (柳樽)
- よめのつまゑんやらやつこ五寸明き (同)
- うら口へ嫁の願ひは鬼すだれ (同)
- もつと寝てござれによめは消えたがり (同)
- 五六度覗いて嫁の夕すゞみ (同)
- 口をすくさせて花嫁腰をかけ (同)
- 一生の雞儀花よめ腹がへり (同)
- 花嫁はめしな敷へるやうに喰ひ (同)
- 糸を巻くやうに花嫁餅をくひ (同)

一〇九八〇七五三三二二

安永

引合はず嫁何さやら云ひは云ひ (同) 一一二)

雨やざり嫁はしよつたりおろしたり (同) 二九)

せんたくに嫁長刀の身ごしらへ (同) 四六)

之等のこれも多少表現に誇張は伴はうとも人間の價値が輕い滑稽によつて否定されつゝも却つてその價値の印象を強く突き起してゐる。輕い明るいそして淡さの中に描かれたフモールの笑ひである。之等を理知的なわざさらしい笑ひと比較したならその氣分の相違は自づこ明白だらう、例へば

秋風をふせぐ持參の金屏風 (柳樽拾遺 安永)

此句は恐ろしく機智的に作者の頭が働いてゐるが、秋風を厭かれることに引つけて其の縁で金屏風を配してゐる、前にあけた諸句にくらべればわざさらしさが多分に含まれてゐる。

持參金よめなげなしの鼻にかけ (柳樽 七)

低い鼻をうごめかして自慢するのである。これは百兩を申す嫁にて候 (柳樽 一七)

謠曲羽衣の『これは伯良を申す漁夫にて候』の文句さりで持參嫁をよんだもの

千金の嫁一つこくをぬかさなり (柳樽 一七)

春宵一刻千金のもぢり (柳樽 二七)

顔疵にして五百兩持參金 (柳樽 二七)

夏の夜や蚊を疵にして五百兩のもぢり (柳樽 三六)

ふてえ奴皮をむく氣で袖を喰ひ (柳樽 三六)

の袖は持參嫁の醜さ (柳樽 三七)

中よき嫁こまうくなきざんでる (柳樽 三七)

は孝行の秀句 (柳樽 四二)

三本の爪を能ある嫁かくし (柳樽 五六)

鬼の留守嫁洗濯の水調子 (柳樽 五七)

八つ橋流のゆび折り嫁をほめ (柳樽 五七)

花嫁を琴責にする十三夜 (柳樽 五七)

九合目の夢で手取りが九十兩 (同) 五七)

『三本の』は能ある鷹は爪をかくす云ふ諺をこりこんだ句作で琴爪三本から琴の才能を匂はせたものは『鬼の留守』は姑等の留守で鬼のゐない内に洗濯云ふ言葉強いてくつけたもの

の『八ツ橋流』は八橋檢校のはじめた琴の流儀だがわざ／＼之を持ち出したのは業平の折句から衣きつゝなれにしましあれ

ばはる／＼來ぬる旅をしぞ思ふの句を八つ橋で連想させ指折り云ふ語をわざ／＼それに引つけて滑稽味を得んさしたものである

『花嫁を』の句は琴の十三絃と九月の十三夜を結んだ技巧的滑稽『九合目の夢』は一富士二鷹三茄子の初夢に富士の九合目の夢を見た爲持參嫁を買つた云ふだけの義で、九合目九十

兩さ九じ結んだゞの作意である、手ざり九十兩云ふのは川柳では大概持參金の相場が百兩を極つてゐる

一人の化ものあり土産百兩 (柳樽 一九)

百兩は消えやすいがあげたは消えず (同) 二二)

百兩は無くなり顔は残つてる (同) 二二)

百兩で綿につゝんだいもが来る (同) 二四)

娘がつくで貰ひ手なし百兩 (同) 二八)

嫁のはき短きさいへぞ百兩 (同) 二八)

百兩で一生あかんべいをされ (同) 三二)

三文もね(つらで百兩の持參 (同) 四四)  
 百兩もつてかつらぎのおかみさん (同) 五五)  
 百兩を男からさる美しさ (同) 三一)

なご、云つた類句も十七篇以後にはかなり見當るが其の場合仲人へ謝禮として十兩やり手取金が九十兩であつた事は

百のくち十兩ぬけた嫁をさり (柳樽 二一)  
 暮の嫁されども手取九十兩 (同) 四七)  
 さる時は九十兩ではすまぬなり (同) 二一)

や仲人の報酬を詠んだ  
 十分一さるにおろかな舌はなし (柳樽 初篇)

なごから推定される。それは兎も角として「秋風を」以下の句にはこれらもつてつけたやうなわざとらしさを我々は感じぬ。そしてそのわざとらしさが甚しい程川柳としての妙味は乏しいと思はれる。初代川柳の萬句合せの中から川柳翁在世中に呉陵軒可有が撰んだ柳樽二十四篇が百六十六篇の柳樽中で比較的高い地位を占めてゐる理由はこのわざとらしさが後のものに比べて極すくないからである。寶曆 明和、安永あたりを中心とする渦はわざとらしからぬ妙味が中心となり寛政以後文化文政を中心とする渦にはこのわざとらしさがつきまこつてゐるやうに思ふ。而も自然の中から湧き上つて来るフォームよりも機智的な技巧的な滑稽味の方がしるうとには興味が深い爲か所謂くすぐりの多い地口や語呂を弄んだやうなものを川柳の川柳た

る所を考へるやうである。甚だしきに至つては一廉の文學者すらさう誤勵して仕舞ふやうな點があると思ふ。例へば  
 善く結へばわるくいはるも後家の髪 (柳樽 四六)

の如きくすぐりの句を川柳の代表のやうにあけた文學史なきを見受ける事は川柳研究者のよく指摘し嘲笑する所である。川柳の本領は墮落期の地口や語呂や理窟にこね合せた所謂狂句にあるのでは無い。類句を考へて證句を考へた他の目的から狂句をも並べる事はあつても今日の研究者は川柳を狂句の上に載然と區別をつけて考へてゐる。此意味に於て未知の畏友三浦圭三君の大著綜合日本文學全史五十二章川柳の條や、同窓の畏友齋藤清衛君の名著國文學の本質の「俳諧では川柳に及んでその鋭鋒は狂歌以上になりました、それは全然地口(上方の口合)の一種になつてしまひました」(同書六七頁)を演繹的に簡単に片付けられたり同書二二頁にされた川柳の解釋に私は遺憾を表したい。

輕く明るく自然にもり上る笑ひは理窟を離れた快よさであるもこより其の快よさは悲痛さか崇高、嚴肅と云つたものから起る心の底に徹したものでなく表面であるだけ極めて輕いつろな笑ひに終る事もあるが、笑はんが爲の笑ひに止まらずフォームリツシエ、フォームから進んでは刺笑に及ぶものが多い。

# 現代漫画大觀

豫約募集全六册

一册一圓(申込金壹圓最  
終の會費に充  
當す)

締切り 三月一日

内容見本は

書店又は本社

執筆諸家 (五十音列)

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 池部 鈞  | 幸内 純一 | 長崎 拔天 |
| 前川 千帆 | 池田 牛歩 | 坂本 牙城 |
| 中島 六郎 | 水島爾保布 | 岡本 一平 |
| 清水對岳坊 | 服部 亮英 | 宮尾しげを |
| 河盛 久夫 | 代田 收一 | 藤本 斥夫 |
| 森山 三郎 | 北澤 樂天 | 田中比左良 |
| 細木原青起 | 和田 邦坊 |       |
| 石井 鶴亭 | 木村 莊八 | 平福 百穂 |
| 石岡 鶴三 | 近藤浩一路 | 森川 恒友 |
| 小岡 芋饒 | 小杉 未饒 | 小川 千蓑 |
| 長原孝太郎 | 川端 龍子 | 中村 不折 |

各册二七四頁以上  
四六判布裝

第二編 現代世相漫畫

第二編 文藝名作漫畫

▼坊ちやん ▼草枕 ▼不如歸 ▼金色夜叉 ▼出家と其弟子 ▼恩讐の彼方に ▼痴人の愛 ▼半七捕物帳

第三編 明治大正史

第四編 コドモ漫畫

第五編 滑稽文學漫畫

第六編 東西漫畫集

現今の社會相をハツキリ寫した大姿鏡それに伴ふ漫文新戦  
明治から大正にかけての名作  
左記八大文藝の画的批評  
▼明治初年から大正末まで六十年間の出來事を描く畫歴史  
▼子供の生活子供の喜ぶ相手すべて子供の樂天地繪の數五百  
古川柳新川柳俳句等及び日本支那西洋の小話の漫畫化表現  
日本は鳥羽僧正より西洋は太古以來の名作大集成と其解説

第五編 「滑稽文學漫畫」 中古川柳及び現代川柳の

選句は 川柳雜誌社主幹麻生路郎先生

發行所

東京市外長崎町

中央美術社

振替東京四七六八二番

に御願ひ致し名句の漫畫化を期して居ます

漫川柳 人の一生 (一) 柴路舟郎 畫評

生きてればまたよい事もあるさうな

雜草堂

瘦癯枯木にも比すべし。無産

なるが故なり。不治の疾患に

さいなまるゝが故也。

こは云ふものゝ、しかく簡單

に世を辭する能はざる也。子

規あり、啄木あり、今われあ

り。慰むるに才子多病ミや云

はん。

柳川 畫



力なく咳をせく

妓の美しく 柳秀

一擧一笑を賣るに時間を以て  
す。

浮沈常なし。多くは病を得て  
煙の如く消ゆ、哀れいふも  
愚なり。

たまくこの廓に齡を延ぶこ  
雖も、一人の伊藤公を發見し  
得ざるものは綾羅に身を包ん  
で質札の堆きを如何せん。



信心に

嵐のなかを

まつしぐら 結美

一心不乱前後忘却、嵐の前に

嵐を見ず

依般若波羅蜜多故、心無

礙、無罣礙故無有恐怖

さても怖ろしきは女の一念也

満願近きにあるべし。



早川 画

一禮に吸物碗の蓋を取り

濁水

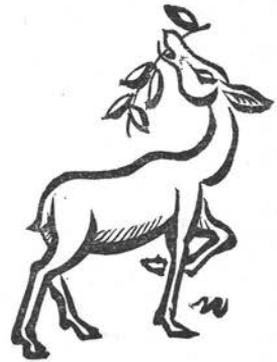
主人、辭を低うして一禮す。吸物碗の蓋は瞬時にしてのぞかれたり。

この時の人間の心借金を忘る。淺猿しさの限り

さいふべし。

主人側の挨拶、名士の講演、拍手をもつて葬り去られたるも宜なり。





# 月評 (前號)

路郎 紋太松郎  
山雨樓 春三 葎乃女

近作柳樺 路郎提出

いゝえ夫婦までとは思つて

居りませぬ 緑之助

紋太一困つたネ、さうも、僕はこの句をほめたいと思ひます。この句を讀むと何んだか斯う自分の頭をがんとたたかれたやうな感じがする。どういふ意味にこの句をさられましたか。

路郎一二人がいゝ仲になつてゐるのです。夫婦になりたいといふ程でもないが、好きであるといふのでせう。女のこゝろもちを味んだものです。

紋太一此の頃の青年男女のゆきかたですか、松郎一やゝ近代的な不貞少女です。同様してゐるのでせう。  
紋太一同様ではないのでせう。戀を享樂してゐるのだと思ふ。

路郎一同様をしてゐるのではない。戀を戀してゐるやうな女なんだ。

春三一兎に角、戀を享樂してゐるんでせう。

山雨樓一さういふ場合を川柳化したのではなく、他の境地にあつて、現在の安價な享樂を諷刺したのだと思ひたい。背景に思想問題があるのでせう。

路郎一所謂モカの心境を斯ういふふうにして七字に盛り得たことは、この作者の手柄であらう。

松郎一思想をあらはしたのではないと思ふ山雨樓一世相でせう。はじめに、「いゝね」もつて来たところは妙手です。

路郎一斯う云つた式で、云ひきつた此の句は古川柳から一步抜け出てゐる。超穿ちの新味がありますネ。兎に角、佳句として推奨するに足ると思ひます。

山雨樓一選句された時、訂正してないでせうね。

路郎一この句に對して、さうした記憶はありませぬ。私はある特殊の場合をのぞいては殆んど句に手を入れぬ、こゝにして居ります。

近作柳樺の句でも、川柳塔の句でも訂正をして抜く句は極く少ないのです。手を入れると云つても句意の變る程度のものでなく、てなはなごか訂正して句の姿をぐつと引締める位なものです。あまりいらひすきて、作者の句ひを失ふことをおそれるからです。それよりは潔ぎよく捨てしまひます。さうすれば、他日もつこよりよき句に更生することがあることを信じてゐるからです。

## 十人に吸はせても赤いく 多喜女

松郎一新しい女の類戀的な氣分が、表はれてゐる。川柳以外の文學では示し得ない妙味です。谷崎潤一郎あたりの小説は一句に纏めたのは作者の手柄で、川柳の持つ唯一の味でせう。「痴人の愛」を想はせられますロシアの小説や戯曲などに、斯うした女が出て来ませんか。

路郎一川柳以外の文學では示し得ない妙味であるとは云過ぎでせう。この句の作者を知つてゐる自分から云へば、この句は作者の實感でなく、想像から生れた句でせう。句のヒロインを女給などに見出します。句そのものを小説と比較しなくても、外國でも日本でも、斯うした女性は多

い。  
紋太一前句より、もつさモダンな女ですネ

そしてやゝそれを讚美してゐるんです。こ  
も角、おそろしいうまさがあります。

松郎一十七音字でないが、調子が、少しも行  
き詰らなく、すら／＼として纏つてゐる。十  
人は人数が多い意味でせう。

路郎一この場合、誰彼れなしさいふ意味の十  
人でせう。

春三一人は概念的な云ひ方だが、こゝで  
は成功してゐる。

松郎一五人でもいかず、百人でも焦點が外づ  
れませう。

路郎一事實は八人に吸はせたのであるのに  
十人として、この句をまごめたさすれば、  
この十人は、一つの技巧だと云はねばな  
らぬ。藝術に、此程度の巧は許されてもい  
いだらう。眞實必ずしも藝術ではない私  
はあまりに、技巧に勝つた句よりも眞實か  
ら生いた句を探るものではあるが、報道川  
柳であつてはならないと思ふ。

紋太一事實八人だとすれば、作者がもつさ方  
があれば、もつさ深く他の方法で表現をす  
るでせう。

春三一人は意識せざる技巧だと思ふ。

路郎一しかし、藝術的價値のレベルは餘り高  
くない句だ。

山雨樓一れらひゞこは漢語ではない。

春三一人は「赤い／＼」に近代的な句ひを感  
じます。

山雨樓一技巧によつて生きた句で、藝術的に

は不満な點が多い。初心者の境地です。前  
句には感情が織り込まれてゐるけれど、こ  
この句などはさういつた複雑味がない。斯  
ういふ句を新しいといふて賞讃するこ  
とは考へものである。

松郎一私は却つて、この句は内容に複雑味が  
あつて、表現の形式が簡單なのだと思ふ、  
かなり長い間の複雑味をよく云ひあらは  
してゐる。

路郎一私は若い人の氣分だとか、思想だとか  
いふものについては常に氣をつけてゐる  
から大抵の場合理解し、同情するところか  
出来るまで信じてゐるが、時には判らない點  
があるかも知れない。それで、斯うした向  
の批評に對しては、春三君や松郎君などの  
若手の批評に敬意を表しておいた方がよ  
からうと思ふ。

生れた句ではないと思ふ。

紋太一戯作的なきういふよろこびを元とし  
て句を拵るのではなく、作句のヒント  
は自然に出来る場合が多いでせう。

山雨樓一しかし、この句を讀むと作句の態度  
に少し不眞面目なものがあります。面白さ  
はありますが、靈魂について深く感動した  
ものではありません。

松郎一作句衝動を興味本位に置いたので  
なく、句主は僕等の想像以外の特殊の境遇  
にあつて、作者の幻想に、知人の死んだ靈  
魂を回想し、非常な淋しさを感じたので  
ないでせうか。

路郎一私が選んだのは、松郎君の考へ方と一  
致してゐますが、山雨樓君のやうな觀方も  
出来ると思ふれば、この句にはごつかに缺點  
がある譯です。然しさうだとも知れませんが、  
作者の境地に同情し過ぎたかも知れません

松郎一山雨樓君の説、私の説とこの句の價  
値はいづれにあるかは問題ですが、疑問の  
句として残して置ませう。人数の合はな  
いさは、數學的ではなく、自分の親しい或  
一人の靈魂が足りなかつた淋しさです。  
作者を知つてゐるのさゝぬないのささは評を  
する時に影響する譯です。

春三一人は知らない私には、靈魂に「さて」  
といふやうな表現で、靈魂さひますやうな淋  
びしさは出てゐないやうに思ひます。寧ろ  
平凡でも靈魂をみつめて作句した方がい  
ゝと思ひます。

路郎一要するに表現が足りないために、誤つて解釋されてはゐるが、この句が不真面目な衝動から生れた句でないことは、この作者の他の句から類推してもうかがひ得られる。一句一句については時に誤られるやうな句の出来るのは短詩の欠點だとも云ひ得られる。箇人句集などではよく斯うした欠點のある句を發見する。長く病院生活を續けてゐる作者は靜にベッドに横はつてゐるく、こゝに幻想を描く、さうすると、同病者で既に幽明境を異にした人々が、誰彼さなくあらはれて來るが、その中に生前一番親しくしてゐた人がゐないのでふさ淋びしさを感じたのだ。それで人數が合はぬと云つたのである。

松郎一作者は淋びしさを淋びしく表現せず、に少し滑稽に詠むのも悪くはないでせう。路郎一滑稽に詠んだために、より淋びしさが強張されてる例はいくらでもあるが、その場合の滑稽は強いて滑稽に詠まうとした譯ではない。

### 近作柳樽 紋太提出

## 金のない親にも親の親心

まさを

紋太一この句の表現法に親が三つ重なつてゐるのはどうでせう。

山雨樓一深みはないでせう。「親心」は不必要です。「金のない親にも親心」で盡てゐます。春三ー親心さいふ名詞があるので、この場合

自然に出て來たのではないのですか。紋太一「親の」で味が出て來るやうにも覺えます。

路郎一孝行がしたい時分に親はなしのやうに金言式の穿ちが、いやですが、この句の場合の「親の」は全然無駄ではない。小さな技巧ではありますが、この句としてはそれが生命でせう。

春三ー親を重ねたのは相當な作家が意識的にやつたのなら悪趣味でせう。紋太一「金のない親にも親心」より「親の」があるだけで、親らしい温みがある。

### 川柳塔 路郎提出

## 立腹のまだ解けやらで夜のめし

駒人

路郎一この句從來の穿ちではない。「まだ解けやらで」の文語を用ひて、すら／＼と叙した點に於いて敏感な若い人達からは平凡な點に見ゆるかも知れないが、少しのいさかひから氣まづい思ひをなしたま、夜のめしになつたさいふ感じをよく出してゐる。この句はまださげやらで夜のめしさいふたりズミカルな點に生命があるのだ。つまり内容をリズムでふくらみをもたせた方だと思ふ。

紋太一句品さいふ點では尊敬します。が、この句は僕等が題詠などで時々取扱ふた境地で、あまりびんご來ません。

路郎一内容に新味の稀油であることは僕自身もさきより認めてゐますが、眞實味のある點、叙法の巧みな點、いくら讀み返へしてもさきこちなきのない點に妙味がありま

す。要するにリズムで生かされた句だ。松郎一淋びしい句です。家庭以外の立腹か、どうか動くやうなのが欠點でせう。

路郎一そこまでの詮索は不要であるが、川柳の約束で、家庭での立腹であることは明白であらうと思ふ。

霞乃女一「夜のめし」としたので家族との争がでてゐます。

路郎一「飯さなり」では弱い。「夜のめし」であつて始めて、その時の光景が躍如としてゐる。

松郎一立腹は喧嘩でないのです。妻君から何か腹が立つたんですかなど聞かれるころがよく出てゐる。

春三ー夫婦喧嘩でも何でもよい。唯主人公の孤獨な性格味が出てゐるので探る。

山雨樓一新味があるかないかは別として實感や巧みに表現したところに、此の句の價値があるのでせう。私は奇抜でないこと、素直に詠むことが川柳家の行くべき正道であると思ふ。そして實感を偽らさずに出すことが尤も重要なことだと思ひます。

一同一同意。

山雨樓一他の會では少し特異なものを見つづけること、それが天になり、地になつてよろこぶ傾向がありますが、それがために、文字の上の遊戯になつてしまつて甚だ遺憾です。

紋太、春三一同感。

# 白襟は密柑を割つたまゝ話

朝陽

山雨樓「軽い穿ちではないのですか。  
路郎「感じの句として探つたのです。  
葎乃女「寫生句です。

松郎「白襟は」は「白襟の」さしては如何です  
路郎「この場合「白襟は」でなければいけない。  
白襟は名詞ではあるが藝者の代名詞なの  
だ。それで「藝者は……話」なので藝者  
は主格だ。「白襟の」「白襟の密柑」といふこ  
と「白襟の」が密柑の形容體のやうにもこれ  
てまぎらはしくていけない。

一同「氣分は出てゐる。  
紋太「斯ういふ軽い氣分の句も盛んにつく  
ることもいいでせう。

山雨樓「斯ういふ場面をスケッチするに甘  
んじるよりも、より深く感動した場合を作  
句する方が、もつと必要ではないでせうか  
川柳でなければ詠へないもの、も少し深み  
のあるもの、個性のあるものを詠ひたいも  
のと思ひます。

紋太「單なる寫生だけの句もいゝでせう。  
松郎「寫生にも個性がこもるでせう。

山雨樓「莢豆君の「冬が見ゆるも何んにも見  
當らず」といふやうな観方が必要です。

紋太「さうするに餘り苦しくなるでせう。  
山雨樓「先輩のお方は大に苦しんで欲しい  
のです。

紋太「此位のスケッチも悪くないと思ふ。  
山雨樓「川柳家の心の持ち方は苦しんで少  
くともよい句を残す方が本當でせう。

路郎「さうです。少なくともいゝ句でさへあ  
ればよいのです。僕も絶えずそのことは主  
張してゐるころです。近来發表する句數  
が段々少なくなつたのは、所謂掘り下げて  
ゆくに随つて句が出来なくなつたのです。  
従來の句であれば幾らでも出来ませう。

山雨樓「先輩の人々は斯ういふ軽い  
スケッチの句は棄て、欲しいと思ひます。  
松郎「それは境地の相違でせう。

山雨樓「井泉水氏は、現今の俳壇は遊戯的の  
ものさ、内心の衝動から起る純藝術のもの  
の二つに別れてゐるが、遊戯的のものは  
矢張遊戯的のもので存在するが、しかしそ  
れは藝術ではないと云はれてゐますが、川  
柳もさうして二つのものに別れてしま  
うでせう。そして川柳もうんざ主觀を盛つた  
ものは多少平凡に見ゆるものでも探つて  
欲しい。

松郎「それでは川柳の範圍があまり狭くな  
るではないですか。

紋太「僕には、さう緊張してばかりでは生命  
がつまかないため、従來の立場の句も必要  
でせう。

春三「本格的には緊張せねばならぬが、大家  
にも小品文がある如く、斯ういふ行き方も  
いいでせう。

路郎「主張としては、遊戯の立場を去つて眞

實を詠はなければならぬのであります  
が現在の柳界は未だ過渡期であつて  
雜誌の上では全部が全部さうした態度で  
作句した作品であることは、斷言出来ない状  
態です。お茶の後の菓物さといふやうな句の  
あるのも、また止むを得ない次第です。し  
かとお互ひは常にさうした氣持をゆるめ  
ないやうにして純藝術的な川柳の道とい  
へようではありませんか。(寓よし兼記)

## 合本と殘本

「川柳雜誌」の「殘本」がまだ  
少し本社に残つて居ますから、欠本  
があるため合本が出来ずにお困りの  
方には左の値段でお預ちします。

第一、二、三卷一部各拾錢

第四卷一部拾五錢

殘本は極少數です至急本社に御申

込下さい、又總布製裝金文字入り

「合本」此際左の値段で御預ちしま  
す。

第一、二卷 金五圓

第三、四卷 金三圓

漫詩  
とばしり集 (一)

長野晴濱

とばしり

嘘は一番悪いんだよ

嘘をつくこ

お閻魔様に舌を抜かれるよ。

然ういつた家へはいれないんです

好きな言葉

ぬかるみの自動車のとばしりを  
顔へほさんこ受けた事があつた。

自宅での不機嫌かららしいとばしりを

とんだ處で戴いた事があつた。

さあ、今度はこつちからだ

私のとばしりは何處へ行くやら。

家

家族が澤山だもんだから

家も、間数の多い

家賃の張る家が必要なんです。

間数の多い

家賃の張る家が必要なほどに

家族が多いものだから

以て遺孤を托すべし—

好い言葉だなあ

ミ私は毎も然う思ふ

以て遺孤を托すべし—

だがそんな言葉が

いつまでも意味を成してゐるやうでは

人類の發展も心細いものだなあ

ミまた私は毎も續いて然う思ふ。

嘘

坊やは好い子だから

嘘を言つちやいけないよ

## 最もいゝもの

最もいゝものは一つだ―

私はさうしても然う思ふ

一つのことを

五つにも十にも二十にも歌ふ

些かばかり向きを變へて

悠暢な

くわんくゝとした

いとこのびやかな

いとおほきかな

時にはいさゝ切な

目で

耳で

胸で  
頭で

言葉で―

それが現代の詩歌だ

だが私は言はないではゐられない

最もいゝものは一つだ

唯一つぎりだ。

與へられたる一人にとつて

與へられたる時處位に於ける

與へられたる物

事

人の中から發見される所の

最もいゝものは唯一つだ。

然うだ、唯々一つぎりだ。

私は川柳に期待する

然り、川柳に期待する。

長閑な駈をかいてゐる他の詩歌に期待

するには

遺憾ながら

時刻がまだ早すぎるやうだ。

## 修 養

君の修養は

大いに君の立場を是認して呉れる様に

君の頭を、人格を

培つて呉れたね。

さうだい、一つ

君には餘り都合の好くないやうな邊ま

でも一つ修養を進めては―



# 川柳塔

○ 松盛 琴人

きりくゝ龍頭をまいて社長夫に  
眞實の響く魂持ちながら  
正月の景色に住めず淋しがり  
風船のふくれるやうに初日の出  
羽子板を持つやうな兒をほし云ふ  
若い氣が四十でおきて皆な泣かせ

○ 三好 革郎

低級な話に合はず笑ひ顔  
老次席自慢の種は子供だけ  
昇給の話何度も聞かされる

○ 矢田 右大臣

幼子のしつかみ抱かれあんぎする  
親類へ泣かねばならぬ子の學資

念佛のあからさまなる六十五

○ 岩崎 柳路

前座にはちと勿体ない囉し也  
その後へ鹿がつゞいて景になり  
辭辭なきする氣ではなく蓄めた金  
足袋の裏の白さを見せて松づくし  
書初に都々逸を書く面白さ

○ 酒井 駒人

局までの粉白粉はザット付け  
北風を横に切つてく赤手柄  
此の路次の阪妻幼稚園から歸り  
水の流れも古里さ云ふ感じ

○ 北山 悟郎

六燭の下に犇めく様に居る

来て見れば六法全書繰つて居る  
家計簿へ正月が来た正月が

○ 高橋かほる

つきあいで来る貝塚の夕まぐれ  
儲つた話に目刺かこうなり  
女將の氣錫の銚子に變へさせる

○ 西本三笑

留守番へ隣の謠曲ながう伸び  
袖口の切れたを隠すひこり者  
違つて連れこ今夜は流して  
北風に女振りから肱を見せ

○ 庄萬よし

寸善に安んじ隣掃いてやる  
愛の巢へいろはの仲居鳥を飼ひ  
奈良にて(二句)  
そつかしいのが大佛の鐘をつき

○ 横田眠聲

薄情なこゝろ金齒が光つて居  
灰色の空醫者ももう手をはなし  
都々逸が上手女郎の手紙もち  
新年の芽出度しサラの下駄をはき

○ 岩本素人

人もの盗んだ頃をなつかしむ  
養子に来て早や十年の厚司なり  
芋粥に嫁姑の仲のよさ  
玄關にかゝれば目刺焼く匂ひ  
芋ほうで母はお猪口に二つ三つ

○ 橋本二柳子

おごなしくしておれば君もだますのか  
宿替をすれば友達なくなるぞ  
世一婚探すこゝ云ひ兼ねる  
逢ふ事を電話で女聞いてみる  
憎まれてもよいさと女強くでる  
一萬圓の利子で故郷で暮そうか  
松の内子供相手に儲けてる  
年を越すまでと失職おちついて  
温泉へ連れてく事を嘘にする  
話がつきて樂書をしてる友

◇ 松丘町二

女房に信じさせる嘘の数  
風邪氣味の嘘は指の股へつき  
因業さ加減乗除の外知らず  
眞横に坐るは帯をキュウミ締め

末席の一人誰妓に云ひまける  
 奴賦然と太つちよの盛装  
 焼拔へ誰妓が二人眼を据わて  
 なびけとも振れこも辻占教へない  
 辻占の作者あなざりがたい腕  
 頭巾きてチンマリさるる冬の母  
 俺さいふ奴は日向のボール紙  
 初戀の舌にもつるゝ出雲辯  
 新婚の隣に住んで鬱陶し  
 思ひきり頬紅の濃さ猿に似る  
 病人の怯えて叱る金盃  
 新妻の落涙きけば火が燃へず  
 新妻の調理活字の恐ろしや  
 揉み上げをキチンミ剃つて小僧春

◇ 中澤 濁水

三味線で騒ぐ隣を妻に問ひ  
 人集り香具師ばかりの聲がする  
 散髪屋禿けたお客が先を越し  
 直ぐまかる上へ少しの慾がさし

◇ 長谷川 一徹

うしろオーライ客も車もはね上り  
 故郷へ来て野小便うれし  
 春水に弟と石投げて見る  
 永い眼で見て下さいと息子云ひ

飲みものの多きをかこち夫人住み  
 ハツキリミ敬意見せるも學者にて

◇ 安西 杏三

小さければ小さいなりに張る氷  
 水仙さ其の影がもつ曲線美  
 笑ふだけ笑つて娘横を向き

◇ 嶋田 翠峯

嘯くは薄情者の姿なり  
 頂上で見下す村のひき摺み  
 見送つた後で家内は喰ひ直し  
 人影をさらつたやうに終列車  
 手を切つて置けばよかつた十二月  
 母親は着物を買つて置けミ云ふ  
 寒菊をいたはる母の老ひ給ひ

◇ 朝田 新水

女學校出て白粉さなりにけり  
 いゝ丁稚親の病氣去んじまひ  
 臺灣へ渡る女の色白く  
 五十にもなつて養子さまだ云はれ  
 隠すまでなく許嫁が見舞に來  
 眞實の話をするも姉藝者

◇ 中見 光路

またしても袂に縋る女の見  
いつからとなく忘れてし母の膝  
合力の片手ないのが怖がられ  
子の晴着揃ふて暮れの氣にもなり  
いらく、ミ不惑子の事金のこご  
吸ひ殻さして斷る腹を極め

◇ 畑田 炭車

くさして隣が小鳥飼ひ始め  
日曜日子守のえらい事を知り  
商賣を始め子供をよく泣かし  
廣告を見ればお金を貸してやる

◇ 水谷 鮎美

妾もう後姿をすけのうし  
連子鯛買ふに巡查の聲になり  
子の藝で機嫌なほして食べてる  
孝行は舌もまわらず賣つて行く  
煙突はいつほんだち云ふ形  
美しく生れて金を過信せり  
紅燈は人魚の戀にさも似たり

寢轉るんで借金ばかり考へる

◇ 石川 双葉子

勸誘員たごへばなしが上手にて  
腦溢血で死ねば樂だミ呑んでる  
家中がいわしにいぶる祝ひ事  
足音にあまり素振りが見ゆすいて  
若旦那新派の型になつて来る

◇ 猪野 燕柳

溺愛が覺めて女はそれつ切り  
寶惠 駕真似て笑はず子が二人  
時計斗りがカチく、ミ惨死體  
お元日止まつたまゝの置時計  
凱旋の父を眞先きに子が見付け

◇ 堀内 靜雲

玉を突くキューの先なる心かな  
石炭の太古を語る口が無い  
せんざいの色になじまず餅白し  
貧乏の手の大きさの下に生き

入超などは知らぬ味噌汁  
ボロ靴よいつまで俺を離れない  
がうまんな高壓線よ雀の死  
化粧美を不足し得ざる凡夫なり

◇ 宮本銀砂子

大衆と共にうごいて恙なし

### 粒々集

大阪 塚崎松郎

親なれば兄なれば呼捨てるのか  
あゝ彼もまた賣名家だつたか  
戀すてふ我が懐中にアスピリン  
四捨五入また資本家にしてやられ  
粕汁の湯氣の中なる御長命

光州 蛭子省二

すひがらを捨てて癡兵吠わられる  
雑談へ障子はすひて鶏歩む  
凧揚げ場でお辭儀され避病舎見ゆる  
賣食ひに柿の花落ち犬が居る  
寢足らぬに雲定まつて土いぢり

松江 青砥不二綱

元日も知らないやうな運轉手  
食ふてゐるやうに駱駝の動く口  
門附が来るこ番頭書き續け  
女房の顔ミは見えぬ火吹竹  
廻禮は女房の里でひるを食ひ

松江大火

燒跡を越して湖水の波が見え  
火事見舞後ろから來て肩を打ち

長春 中野柳陽

懺悔する心へさける如來の眼  
ハツキリミ忍從の目へ柄袋  
幸ひに顯微鏡ほご目がきかず

御影 長崎柳秀

入札の戻りにくゞる繩暖簾  
家政婦は柳に風ミ受け流し  
次の幕舞妓一刷毛あてゝ待ち  
雑煮餅子供の口に長ら延び  
腰抜けと云はれる奴に錢が有り

# 古句質疑

## 蛭子省二

### 質疑小規

(一)質疑は古句に限ること。なるべく古句の出所を書添ひて置くこと。(二)質疑はハガキで一人一回三問までのこと。(三)質疑のハガキには住所姓名を明記すること。但し諱上の匿吉は差支なし。(四)一度答へた句、末番の句等については答へない。(五)質疑應答は必ずしも先著順ではない、研究の餘地ある句は次號廻はしらす。質疑輯録の場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社古句質疑係宛のこと。

### 柴を乗る船頭は口巧者

名古屋 柳圃生

此の種の句は、解する迄には非常な苦心のものであると同時に。わかつたら氣抜けがする底なものの、之れは謠曲「兼平」の始めに、

世の業の憂さを身に積む柴舟や、焚かぬ前より漕がるらん、のう／＼其船に便船申さうのう。是は山田矢橋の渡舟にてもなし御覽候へ柴積みたる舟にて候ふ程に便船は叶ひ候ふまじ。此方も柴舟と見申して候へさも折、渡りに舟もなし、出家の事にて候へば別の御利

益に舟を渡してたび給へ。實にもく／＼出家の御身なれば除の人にはかはり給ふべし、實に御經にも如渡得船云々柳橋如渡得船と乗つて出る(古句)愈々船に乗つてからのワキ即ち旅僧の詞に。

如何に船頭殿に申すべき事の候ふ、見え渡りたる浦山は皆名手にてぞ候ふらん御教へ候へ云々わり膝で如何に船頭殿と云ふ、古句)こんな風に文句取をやつてゆかれては、後代の研究者が徒らに苦しむのみである。そして、文句取吟の多くは街學臭がある。

詩的價値が乏しいのである。

### 神田川堀割る人をふり通し

(三十一篇)

東京 鉢太郎

仙臺侯對高尾問題詩してはつまらない増訂武江年表に、元和二年十月神田川堀割拜堤を宰せらる、萬治二年神田川堀割の事。仙臺侯へ命ぜられ、今年御嘗請始まる、明年にいたり大川より柳原通り、御茶の水下通り、駒込吉祥寺舊地側より牛込にいたり、御外廊御堀出來して大川へ通路と成る、云々。「江戸名所圖會」には、神田川、江戸川の下流にして湯島聖堂の下を東へ流れ大川に入る。明暦より萬治の頃に至り、仙臺侯命を奉じ湯島の台を掘割、小石川の水を初めてこゝに落さるゝ云傳ふるは少しく誤るに似たり。古老の説に慶長年間、駿河台の地開ひし時に至り、水府公の藩邸の前の堀を淺草川へ掘つゞけられ、其土を以て土堤を築き内外の隔さなし給ふ云々、此

### 中裏を夜具とすれ合ふむきみ賣

下關 臨池 生

拙稿「生業の古川柳」(五十一)に掲げた例句で中裏の説明をせよとの御事であります。夫れには寛天見聞記の一節を抜くのが適して居ます。「深川土橋の娼婦は、價晝夜十二匁づ、五つに切る、ひいき横町の子供屋より呼出し土橋にあそぶ仲町も中裏の子供屋より呼出し、仲町の茶屋にあそぶ、表櫓裏やぐら裾つぎさもに價晝一步二朱夜一步ひき切は二朱也。表矢倉の裏に子供屋有て、爰を大裏さいふ裏やぐら裾繼は子供内にあり……」

### 謝近火御見舞

大火災の節は早速御見舞を頂き厚く御禮申上ます一時は類焼の危きに罹りましたが御蔭を以て無難損害は有ませんでしたから御安心下さい。

松江市天神町

### 青砥不二綱

賤群集せり、文化の始に絶たり。これ丈けで句意はわかる様です。後は追補致します。

(附記) 同じ「光州雜筆」中で、高輪で化けたが來世牛になり、を説いたが牛に成つた一例が、村井隨筆に載つて居る。

○出家うしに成る(芝三田魚らん觀音の先住うしに成)

此の魚籃觀音は淨閑寺と稱し今尙ほ在る而相唐女の如く美貌で心地よい。木像にして六十許り古書にあれど、私の拜むだのはや像にして、随分大きかつた。趣味ある傳説がある。古句に

魚籃近所かと頼 光聞玉ひ  
此の魚らん寺の事である。

### 眞黒な餅を鷹には見せて置き

大阪 三 笑

三笑氏御質疑中の一句ですが、確信ある解を下し得ませむ。廣く識者の教をまちます。(駄勞解を附け得る程度迄は考究してゐます)

説しかるべきに似たり。按ずるに昔は舟の通路もなかりしを、仙臺侯命をうけたまはられし頃、掘廣け今の如く舟の通路を開かれたりしなるべし。

此の神田川堀割に關連して  
神田川またいで通る猪の頭  
内神田通りのいいは猪の頭  
四つ谷から水掛論に枝が咲き  
等の句意もわかる。武江年表承應二年の條に非常に詳に狀況が記載されてある。

### 太右衛門は獅子

### 太郎兵衛は牛を飼(廿六ペ)

東京 秋 二

此句は九月號拙稿光州雜筆中に記した爲め、御質疑が出たのであります。實は自分も未だ詳に調べてはゐない。

牛は動物であるが獅子の方は本物ではない。對照が無理のようでもある。武江年表寛政年間の記事に、

いつの頃より始りしか、西が原に湯島の牡丹屋太右衛門の別莊ありて、花壇に紅白の牡丹莢をあらさふ。盛の頃貴

募

集

句

父

篠原春雨選

初心者の迷路

松盛琴人

病んでゐる母へやさしく父咄し 玉政  
 黙つては居るが父親知つてゐる 杏三  
 父るます時に出入をした男 光哉  
 呑み込みの早さを父は危ながら 穂波子  
 先生の前ではお父さん云ひ 狸庵  
 父の顔見て頼勢を盛り返し 菊路  
 父さんがなぜないの母を責め 水聲  
 私生子に今を時めく父があり 千鳥  
 父親にそむいて苦學まだ続け 高峰  
 電報の聲に父親を考へる 箱八  
 いつの間にか子供に甘い父と 晃卓  
 孝行が褒賞貰ふた父ミ聞く 九柳  
 父死んで方針かはる男の子 虚白  
 不機嫌な父に皆んなが遠くゐる 伴内  
 強い齒が父の自慢でありました 二竹  
 儲けやうただ儲けやうの父なし さ、舟  
 父親の出るのを待つて息子も出 志郎  
 父祝はいつそ女がまし云ひ 曼平  
 裏長屋父を綺麗な娘が見舞ひ 町二

試験の成績を見に父を連れ行く 素人  
 長女に委せた父のネクタイ 萬よし  
 父親がなくて辛い樂に喰ひ 花蝶  
 父尙地位名譽にあやつられ 翠峰  
 厭父尙地位名譽にあやつられ 翠峰  
 卒業へ一杯呑め父はさし 木三  
 大菩薩峠が父が面白し 亂取  
 物干の襦衣に父の姿を見 觀月  
 いたづらを見つつかつた父の歸り途 風鈴坊  
 父居れば中學位ひ行けるもの 將兵  
 松の内母より持てる父になり 光路  
 氣の折れた父は知らず云ひすぎ 蒼梧樓  
 女工もう父母のこころなご口に 柳秀  
 おかしさは父儀節を知つており 吐露樓  
 父親は後妻へたん義理があり 吞陽  
 お叔父さんへ何か詫びて父の影 鳴穂堂  
 父にしてまだ角帽の身分なり 新水  
 けんこつを張る眞似をして父は行 惡源太  
 おづ／＼と歸れば父は起きて居 突支坊  
 父さんは良い人酒が悪いやつ 吉朗

本誌課題に借家云ふのが在つた。借家  
 借家この自他區別は勿論判然とあるべ  
 きであるが作句中にもする借家混同  
 し易い、全くの貸家の句となつて了ふ事  
 がある。是等を稱して傍題云ふのであ  
 らふ。併し貸家云ふ文字を使用しても  
 句意が判然と借家である場合もある。若  
 し其選者が寛大であれば貸家も同意義で  
 通過さす事も有るが、それは正確さを失  
 ふ事になる。先きに路郎氏の朝顔の垣根  
 越しの如く「ごし」「こし」の意義の  
 相違さへ正されしを以てすれば、作句者  
 は初心者、雖も注意する事だ。則ち傍題  
 は禁物云ふ事になる。先輩者はさうし  
 た誤りは無いが初心者は能くやる。私が  
 本題を捉へて借家となつた句を二三並べ  
 て見る。

借家もう屋根が貰け壁が出来  
 いんごうな大屋の借家ふさがらす

父へフト寝かけた子供起きて来る  
 黙々父は机へ向ひたきり  
 かみそりを使つて父を思ひ出し  
 母の氣も知らずに父をまた尋ね  
 父親が無いとは見ぬぬ育て振り  
 お父さんは偉いお方と聞いた  
 ほんごうに慾を離れて父を見る  
 父の聲子供は泣かんとしてだ  
 神棚の掃除めつきり父は老け  
 代筆を子供に委す父となり  
 借り物のオモチヤを見父の前  
 もの云はぬ父と息子で日が暮れ

三次 郊村  
 武藏坊 邦文  
 同人 琴人  
 眠聲 玉仙  
 同 冷笑

### 素人

あべこべに素人様に引かゝり  
 素人の手には合ぬ醫者を呼び  
 素人がすぐ引つかゝる廣告し  
 素人の中で上手な巾がき  
 袴をつけて素人唸り合ひ  
 大會の素人ばなれ二三人  
 初めてにしては上手と師匠云ひ  
 素人でない白粉のつかいぶり  
 素人を放れた藝にこの暮し

菊路 水聲  
 彩秋 千鳥  
 箱八 晃卓  
 新一郎 松壽  
 九柳

### 相元紋太選

兄の死に仕事がいやなと父  
 恩給が付く迄三言ふ父の腹  
 女客父が居たので立話し  
 言ひ出しはせぬか父を恐れ居  
 貧しさを外に父親鳥を飼ひ  
 失業の父に片意地だけ残り  
 (佳)父だけを残り芝居(行くと決  
 (佳)あれきり親爺普選を口に  
 (佳)父の事くさし母は年を取り  
 (佳)父の名を云つてお茶屋持  
 (軸)いゝ器替連れ子は先の父に似

同 金魚  
 同 多喜女  
 同 鳴穗堂  
 萬よし 陽喜亭  
 衣通史 春雨

素人にして見れチトふけて居る  
 淨瑠璃も少しは演れる和尚様  
 おしい咽喉師匠も骨をおる話  
 提灯にこん夜あります素義の會  
 素人が何をいふかと負碁いひ  
 落籍れて小供が一人ほしくなり  
 弟のはつた隘子を父はほめ  
 素人のかなしさセキセイがころ  
 煮え切らぬうちに素人賣損じ

虚白 緑之助  
 夢人 蚊注射  
 二竹 篤人  
 冬木立 眠聲  
 玉仙

### 誤解小觀

萬よし生

(一九二七、二二八)

十軒の借へをもつてつましく居  
 以上の借は皆貸でなくば句意か通じぬ。  
 そんなフワツとした頭が誤りを生じさせ  
 る。夫れは充分注意しなければならぬ  
 是からも猶斯うした題は多く出るに違ひ  
 ない。又過去に於てもさうした誤りが澤  
 山有るに違ひない。で此際自他共に注意  
 するのみでなく、本誌の使命さしても此  
 際初心者爲めに多方面より例句を舉げ  
 て蒙を啓いて頂いたら誠に結構だと思ふ

同じ大晦日でも元旦でも、或る人には好  
 感を以て迎へられ、或る人には悲觀を以  
 て迎へられる。或る人には平日さ毫も異  
 つた感じがない人のすること善意を以  
 てすることは善意に解釋せられ、惡意を  
 以てすることは敵意を以て應酬せられる  
 ならば、人生は目出たしく、以至極平凡



素人の熱に口上長いこも同  
 素人に問へばあつさり片付ける亂耽  
 アマチューア秋の港でと。決め同  
 素人に運が向いたかよく當り鮎美  
 素人になつてお墓の水を替へ同  
 素人の眼に落選盡惜しがられ風鈴坊  
 素人は只ハア〜と聞いてゐる同  
 青訓へ除隊の兄が来て笑ひ愛波  
 素人が打つとで、来る釘の先同  
 もう世辭を言へ程バザー慣れて來。同  
 風呂屋なごづぶ素人に出來そ。花蝶

### 定宿

◇ 山雨樓選

定宿の家に交り雜煮なり突支坊  
 定宿がこみ合ふてゐる祖師遠忌琴人  
 大臣の揮毫が残る御定宿愛波  
 定宿へ着て行商草臥れる穂波子  
 定宿の一人出てゆく雨の晩箱八  
 定宿の行燈いつものやうに點き漫酒樓  
 定宿で追手困つた飯を食ひ町二  
 定宿の芭蕉無意味な程にのび亂耽  
 堂ビルを定宿として金貸さず素人

高商を出たのが損を重ねて居同  
 素人でないと昔を語るなり同  
 素人にしては器用な棚を吊り琴人  
 素人の嫁心淋しく夜が更ける同  
 素人くさいと嫌は乍ら子を自て同  
 素人に素人らしい箱が出來同  
 (佳)大膽にやれと素人勵けませ。水聲  
 (佳)好いての柄へ素人よくさは。鮎美  
 (佳)そんなと出來るの素人云ひ新水  
 (軸)いゝ女皆素人の路次にゐる紋太

福田山雨樓共選  
太田朝陽

定宿へ妻の手紙が先に着き二竹  
 定宿のお見外れ申した頭下伊冷笑  
 お先達定宿へ来て幅利かせ六造  
 定宿で機嫌の唄に寝てしまひ九柳  
 行商の定宿へつく峠ごし香行  
 定宿の灯を見て疲れ切つた足白鷗  
 定宿の親爺と同じ國訛り吐露樓  
 定宿の心安さに靴をぬぎ町二  
 定宿の娘は母になつてゐる同  
 團体旗大分離れて宿に着き亂耽

は同情者の善意に過ぎた誤解である「俺は半々凡々だよ」「あなたは人格者じやありませんか」「僕は半獸主義なんだから」「閣下は規範的紳士だから」などは未だしも「俺は不正の金なんか入らないよ」「なに天才に對する社會の自然的報酬なんです」なごこ來るこ、こてもやり切れない。この最眞の引き倒しにかゝつては精神的箕浦事件、西南事件に陥らなものは殆んどない得べからざるこまである。秦を亡ぼすものは秦なり、日車氏の句に曰く  
 平凡になれ一つ捨す二つ捨て  
 (十二月六日稿)

### 「時代大觀に就て」を讀みて 川柳大觀に就て 八木 毒仙

四五頁―四六頁の句に就し  
 私の幼少の阿母のお伽噺に唐へ曆學の研究に渡つた阿部の仲麿が吉備大臣に非常に圍碁を以て苦しめられ遂に「天の原ふりさけ見れば春日なる」絶詠を遺して

定宿の火鉢の炭が寒う消え 將兵  
定宿の隣り夫婦でないらしい 箱八  
隣り又定宿らしい下女の聲 緑之助  
定宿の勝手が違ふ代がわり 町二  
定宿が仲人縁談ほゞきまり 伴内  
團長まなつて定宿喜ばせ 花蝶  
定宿で今日の疲れを膳で言ひ 玉政  
定宿は子供が先に名を覺ゆ 照葉  
定宿に病んでゐるのへ三味の音 二竹  
定宿の浴衣のままで灯を歩き 翠峯  
定宿を汽車の窓から淋しう見 陽喜亭  
定宿の亭主 一目強いなり 緑之助

五 客

定宿で團体さわぐまいこまか 亂耽  
定宿へいきなり着いて忌中なり 町二  
定宿の行燈に粉雪吹きつける 郊村  
定宿は手すりの下に船が着き 亂耽  
土地の妓を呼んで定宿雨に更け 町二  
(人)定宿の心易さは叱りつけ 其象  
母親が冬休みに歸つた息子の不行儀を黙  
つて居ないこと云つた心持で、女將や古い  
女中等に一本やられたところは情味たつ  
ぶり。

(地)定宿のお蔭様でさ離れ建て 眠聲  
調子の揃つた經營振りに、家運漸く隆盛  
に向ひ、暮れに來て見るさ氣の利いた離  
れ座敷の木の新らしい、まだ軸が、  
つてゐないところが可愛い。

(天)定宿へ儲けたらしい顔で着き 其象  
いつもより聲が大きい。履物をぬぐ間に  
もう話しかける。顔を見せぬ女中のこま  
なぞ聞いて二階へ上る。宿の亭主の鬚星  
も違つてゐない。  
三光共にホイロンの運勢上々吉。

◇ 朝陽選  
(軸)定宿で一人ぼつちになつてゐる 山雨樓

増築もして定宿の廣い庭 冷笑  
定宿の火鉢の炭が寒う消え 將兵  
定宿の女中廊下でからかわれ 如水  
定宿は主人と馴れて差向ひ 照葉  
定宿へ儲けたらしい顔で着き 其象  
定宿ときめて仲居に握ぎらせる 翠峯  
定宿さ行燈に書いた太い文字 柳秀  
定宿はいつもの部屋へ通すなり 同  
盆正月さ定宿から葉書 吐露樓  
定宿の主人は園藝の相手なり 吞陽

業成り乍ら客死し其子晴明父業をついで  
渡唐し業成るに及んび再び同様園藝を以  
て歸國をはなれし時父仲磨の靈蜘蛛さ  
なつて盤面の難局を導き吉備夫人又石を  
嚙下して晴明を助け歸朝の船には蜘蛛が  
乗つて居たさ云ふ………もさより文盲  
な母の物語根據の有無は私の存せぬ事乍  
ら四五……四六の四句はかゝる物語さ何  
か關係がある様に存じますので改めて御  
教示に預かれば幸甚。

六一頁の弘法の句は——乞食坊主が崇め  
られるがまゝに弘法にばけて滯留を續け  
たさ云ふのではありませんまいか——近頃  
あつた演習地廻りの偽せ中尉の様に」  
一〇四頁の句——「松をつれ蚊帳をつれ  
」は「松王」つれ蚊帳をつれではないで  
せうか  
九五頁——愛宕の土器投げは京阪地方の  
ものは大抵判りませう「洛西愛宕山」  
一〇二頁——此分先生のお叱りを恐れま  
す。

二代目になつて定宿客が減り

連中がいつもの宿へ來てるなり

定宿の裏は鐵道線路なり

定宿と見えて少しは無理も云ふ

兵營病院並んで太く御定宿

定宿の仲居は客のくせを知り

定宿へ來て先代の話もし

娘もう定宿には見えぬ朝

定宿の案内に交り雜煮なり

定宿の帳場に秋の衣を更かし

堂の下定宿とするあれも人

定宿がこみ合ふて居る祖師遠忌

一寸出た其定宿へ友が來て

大臣の揮毫が残る御定宿

定宿の亭主一石強いなり

定宿の手拭ばかり旅馴れて

我儘な客に定宿しむけてる

北公

定宿へ昔の女尋ねて來

定宿の心安さに靴を脱ぎ

定宿を替へてトランク氣に掛り

定宿で何時もの仲居におごら

定宿で變つた國の事を知り

佳 句

定宿に空けねばならぬ部屋が出來

定宿の床に手足はうんご伸び

定宿で變つた國の事を知り

定宿に團體客の騒がしさ

定宿の氣安一風呂浴びてゐる

定宿は嬉しい河豚のすきをつけ

定宿に病んでゐるのへ三味の音

三 才

定宿へ來て行商の草臥る

定宿はお國訛りで用が足り

定宿の番傘驛の雨に立ち

(軸)萬歳の聲定宿へ人だかり

五月雨の句 私の考へでは東三條疎水

蹴上明治の初め頃まで刑場であつたを申

します。

「今の都ホテルの邊り？」故老の話では

今もゴツゴツする様な獄門やあらゆる慘酷

な刑罰の有様を聞きます勿論夜は人の氣

もなかつた事でしょう五月雨の頃には晝

も尙ほ……………。

一六三頁の句——袴垂馬さろほうで云々

袴垂馬さろほうで味噌をつけ

袴垂保輔と平保昌を句にしたのではあ

りませまいか——勿論私は原句を知らな

いのでありますが」

移轉御通知

喜田飯山

左記へ移轉仕候、柳友諸兄に乍失禮以紙

上御通知申上候

青森市古川町美法二二七

# 知十翁の

## 柳俳無差別観

竹馬居主人

新年號の私の「川柳瓊音先生」中、長尾氏の言葉を引用した内に

岡野知十氏のいはゆる俳句川柳根本無差別観に共鳴して云々

に對し、此の無差別観とはドンナ内容のものなりやと、一讀者から、お尋ねに接した。これは明治三十五年頃の翁の御意見であるから、餘りに古くして私も記憶がない、何にかに印刷されて残つてゐるようが、手元に何も無い、古雑誌をひつくり返して探した結果、明治四十二年六月號、「新半面」誌を見出した「半面の風調」なる項に

……しばらく俳句の有するところの上より見るも、半面の近き風調が必ずしも破格にあらず、余はその破格の更に更に破格にあらずとこそを望む者である、芝の福住に讀賣俳壇の大會を開いたのは既に六七年前である、余は當時俳句は必ずしも發

句にあらず、發句の條件とする季題並に切れ字は必要にあらず、聯句を透風せよその一句の平句は亦是俳諧の句にして、これには切れ字、季題を用ゐずして、しかも一句立として、俳句一章と稱すべきものである、ここに於て余の意見はある意味に於て川柳俳句無差別なる何さなれば川柳は廻れば俳諧の平句の一に過ぎぬからである、さいつた如き所説を吐いたかに覺て居る、新半面の俳句の傾くところを見るに、多くはその人事を咏じて、印象朦朧たるところ、ドウしても前句ありて然るのちに解道し得べき境を前句をのぞきて一句とし、その前後に幾多の情景をあまして、之を探索玩味せしむるさころの致を存して居る。所謂舊型の發句ではない、却つて平句の體を爲して居る。

此の言葉で大體わかるであらうと思ふ川柳家が武玉川俳諧廳金砂子等々を悦ぶ態度を考慮され度い。川柳仲間には随分江戸張の通人タイプの方を見受け、まゝ獨りて春負つて居る様な口吻さ聞かされるが、日常の行動、その生まるゝ作品が神經衰弱的なにあきたらない事が多い知十翁は洵、洗練された江戸趣味人で、私は青年時より敬畏して居たけれど、其

著三を書架に常蔵するに過ぎない「湯島法樂」の一節に

江戸座の平句が妙でないことはない、しかし一々妙とは思はぬ、且つ少々深刻が足らぬ、そこが江戸趣味かも知れぬが「ひざいネ」ではもの足らずして「猛烈だ」さ呼ぶ今日には、いかにも淡泊にも軽浮にもある、ただその情景をうつつして活躍するところ、刹那の呼吸をすかす早取りにするところの妙は、切字、季題配合などを以て勿體ぶりに發句體よりも氣が利いてゐる、たしかに旨いなさいふ俊味がある。

火もらひの吹きく、人に行當り久しぶり互ひに傘をさし上げて向ふから女房も遣ふ硯箱

いづつも例には及ぶまい(中略) 髮結ふた跡も仕舞はず繩すだれこれは前句がなければ解しにくい景であるしかし解しにくいにしてもこれ丈で何だか面白い光景であるこれをこの人物さか時分さかいふものを明瞭にしようとして改作すれば、一句立ててして印象はハッキリしてもこのハッキリせぬところの妙味はなくなる、平句の妙はここにあるタカが十七字の短詩形だ、どうせハッキリゆかぬとすれば、ある場合にはこれで足りるさいはげばならぬ……

現代川柳家の作品を見るに朦朧體のもの

でも、ドコかに理窟の閃きがあつて大嫌でない、開放された温情が妬まれずして感激の制肘があるよつなのは、時代相でもあらう、尤も個性が小さい云ふ事もある、周囲の現實的な藝術味譬へば野に於ける百合の花の如く、大自然の一箇の威風が根本に還元するをだやかさが欲しい、川柳俳句無差別観は川柳俳句の歴史的发展に還元的情緒の一角を論議されたものさ心得てゐる

此の方面に生きたる川柳家があつてよいなくてはならぬ盡さゞれ共お答こする。  
(一月七日記)

# ふろふき

## 岩本素人

川柳人

川柳家三言ふより川柳人三呼ぶ方何もなく感じがいゝなり、たいした理由はあるにあらず。

又。

作句數多きが故を以て川柳人たる能は

ず、良き句を吐くのみにも尙未だ川柳人とは言ひ難し、川柳化せる生活を生活するものに於てのみ初めてこの稱を享くに相應し

面白男

面白男必ずしも川柳の素質を有つてあらす。

追従者

尊敬せる先輩には其句風まで似て來るものなり、追従は墮落の第一歩なれば心すべきなり。

パン製造

キリストを技師に雇へばまるキは儲かるならん。然れども吾まここに汝に告げん、キリストのパンは信仰より成る藝術品にしてまるキのパンは算盤より生じたる商品なればなり。

食人種

食人種は野蠻なり三言ふは、こちら人間であるが故なり、文明人は牛でも馬でも鯨でも何でもバクツク也

人形

いくら顔が美しくても着物が奇麗でも呉服屋のウインドーの人形に戀したる奴たぎ未だ耳にせず。

技巧

洗面器の水をビール瓶に移さんとするものを川柳人ミス、瓶の口径僅々十七文字技巧を要す所以

又

技巧の目立つは未だ味噌の味噌臭きもの、表面無技巧の如き技巧を上乘とす

獨創

間違の無き人真似よりも間違のある獨創の勝るや遙數等

型

型に入つて而して後型を破るべし、初手から破つてかゝるは現代人の特短

卑怯もの

路郎の選公平を缺く陰にてほやける輩ありき、やめきけ 何ぞ堂々論陣を張らざる、心情のろうれつなる寧ろ憐。

# 氣障

わたくしは氣障ですなき言ふは氣障なり、言へばよいよきざなり、きざこ思はれざらんミ務の振舞へば益々氣障也

上。に。上。

人間の力量計り知るべからず、上に上あり下に下左程なし。

# 無題

子曰く

友遠方より來り喰ひ倒し

# 閑庭の松

閑庭の松に越す手がひつかゝり  
 笛の名人故森田操氏がいつかこんな事を言つた。

閑庭の松に越す手がひつかゝり

ミ言ふ發句がある。芭蕉の様な偉い人でも此越す手には困つたミ見へる。この位越す手はむつかしいもんや。

僕は名人ミ言ふものは天でものを知らないものだなミ思つた。此物を知らない所が亦名人らしくて面白いミ思つたこの句は言ふ迄もなく狂句で芭蕉の句で

ない事は分り切つてゐるからである。

越す手ミ言ふのは鼓の手の一種でハーポツヤハーポツチハボミやる所だ。詠曲「東北」のノセに九夏三伏の夏過ぎて秋來にけりミ驚かす閑庭の松の風云々ミ言ふ文句がある。この閑庭の松ミ言ふ所で越す手を打つのである。ミころが此の越す手ミ言ふのは初心には一寸面倒なやつで詠にうまく合はない。もつれる様な工合に成つて困る。このもつれる事を斯の道では越す手がひつかゝるミ言ふのである

(昭三、一、十)

## 記憶録

### 安川久流美

牛乳屋第一番に雪を踏み

この句は札幌の破魔丈氏の句である。傳統的の川柳ではあるが、同氏が古く柳樽詩同人たりし時の句ミして捨て難い句ミ思つた。第一番が機智である。夜を眠れぬまゝ、誰よりも早く起き出でる牛

乳屋の姿が頭に閃く、北國の人の作であるから殊に句が意識される。

二番目は同じ作でも江戸生れ

よく柳詩上に問題される古川柳だ。お地藏さんの句である。然しこの句の作を「顔」の字にしたら、川柳後學者たるもの「地藏」さんミ人間ミを間違やしまいか？ミに角參考書かなければ解らぬ考證の句である。

讀美歌をうたふ牧師の鼻の穴

之も舊柳樽詩に於ける重鎮、川上三太郎氏の舊作である。滑稽な句を作る點に於て當地の元老銀波樓氏が

「柳壇に於ける一茶じや」このたまふた如く、事程左様に句の内容を第三者の眼から滑稽視された人である。同氏最近川柳雜誌社の社友ミなる、私は川柳の友人ミして欣ばしい事の一つであつた。

西行はヒマラヤを見る折がなし

よく私が扇や短冊に筆を揮つてかく句である。この句は劍花坊氏の

タゴールは芭蕉の詠んだ鐘をきき

ミ對照したまでの浅い句である、西行の時代ミ、タゴールの時代、日本ミ印度久流美ミ劍花坊、富士ミヒマラヤ、たゞそれ丈のこゝが永遠にのこる氣かしてならない。

○ 油繪の父分別ミいへる頃

之も私の舊作である、確か「百萬石」の創刊號に出句したもの……そして當地のうみ三氏に推賞された句だ。それは私を知る同氏の觀察からで、事實は駄句である。然し川柳はいつまでも諷刺でなく皮肉ではない。もつこつき進めに自己生活を主觀するに限る。私の句は抹殺されても、油繪の父は永久に消へない。

○ 法政大學川柳會が生れたけれ共、それは影の如く消へ去つた。それはほんの一

時的ではなかつたか川柳は大學に非ず社會の幼稚園にして大きく見られないのは全く嘆かばしい事である。その昔大連から「川柳幼稚園」なる柳塾生れてるたが今はさうしたか。川柳の芽が、むくく海外にはびこる現在に於て見ても川柳を大學程度にすゝめてほしい。そは麻生路耶氏の努力を待つより他はない。

○ 親類が凡夫で困る哲學者

之も川上三太郎氏の舊作である。川柳は哲學だ！ミ獅子吼しても、うけ入れてくれない社會である。社會はわからずやの親類だと思つて、句に精進する、其處に川柳の妙味がある。

○ 左記は私の近作である、心あるものよ忌憚なく批評して私を鞭撻して欲しい。

○ 釋迦眠り給へり凡夫掌  
一人さへ信ぜられぬ逃避かな  
シャボテンの針の痛を撫せと見る  
かゝりはなるが雲の行を見よ

(昭和二年十二月卅日記)

ルービヒサア



# 各地柳壇

## 本社新春句會

本社新春句會を一月八日日本橋俱樂部で開催。當夜路郎主幹より(川柳の前途)と題して最も有意義なる講演があり、尙各選者より年頭の祝辭を述べられ、選句の披露もありました。此句會に青森へ轉任された喜田飯山氏より青森名物の林檎、公立社より桃太郎の研究、越村加香氏より川柳香水の寄贈あり、來會者に分配一同紀念攝影をして盛會裡に散會(二柳子記)

路郎、長崎博士、迷亭、蹄二、楓林、馬行、放馬、松郎、かほる、琴人文蝶、松山子、翠仙、毒仙、新水、双葉子、翠川、翠峯、青子、伴内、三次、山雨樓、蒼梧樓、耿三、武藏坊、惡源太、虛白、吉期、加香、革郎、

公立社、木三、二水、二竹、狸庵、柳象、梅風、幸泉、秋風、秋水、彩秋、義情、十紫蝶二、九柳、孤舟、陽喜亭、青蛙、疾車、よし江、二南、亂耽、泰平、紋太、三笑、柳骨萬よし、ひろし、源坊、悟郎、閑路、二柳子

旅 路郎 選

妾もう且那の旅を待つてゐる  
つよかれさ母は陰膳忘れずに  
旅先きてハツキリ雪の速きを見  
旅立ちに母はおみくじ引て來ひ  
旅に來ておやくと云ふ人に會ひ  
旅の留守一輪さしを換へて置き  
旅をするその夜は母のそばへ寝る  
東京で刈り長崎で罷を刺り  
大臣の初旅伊勢へ廻るなり  
船の中聞けば我子と同じ年

翠 源  
虚 白  
惡 源  
よ し 江  
革 郎  
か ほ る  
翠 峯  
悟 郎  
彩 秋  
吟 女

旅に居る筈の良人を見たさきき旅なれた一人が早く手をたたく別府から帽子眞深に歸つて來旅三日茲もラザオの響く宿旅の宿爲替着く間を疑はれロシヤ行がトリツクなると氣の輕ホネムーンあれもこれも持ち味噌汁の無茶にからいも旅のこま旅のきまぐれ口説いてやらう旅先が知れて綿入縫ひ續け一人旅話せば話す顔である(人)眼鏡もく間もある旅のおも(地)旅もして來た俺は我を通し(天)旅にしてうちが氣になる程儲

池 迷亭 選

天王寺 龜のお池に鳩が下り  
平凡に池森の影山に影  
この池は通れる地圖を歩哨見る  
半分は陸になつてる池の水  
池だけを殘して白く積るなり  
池のある家借家さは思はれず  
北風に池の面のさしやいて  
靈の池へ心中無用の札が立ち  
美しい娘が好きな池の主  
棒抗に六反池の跡さあり  
池の水キツスのこで波がゆれ  
池の岸二人が泣いた日を想ひ  
一ト廻り池をまはつて見合濟み  
鯉つ跳れてトツア日暮れる  
留守なればいつもの池と馴れた友

選 萬 泰 松 同 同 亂 源 加 紋 蒼 山 雙 琴  
萬 泰 松 同 同 亂 源 加 紋 蒼 山 雙 琴  
よ し 江 亂 耽 萬 よし 蝶 二 彩 秋 泰 平 十 紫 狸 庵 琴 人 虚 白 革 郎 三 次 伴 内 蒼 梧 樓 馬 行



かまぼこの板現はれて風高し  
 風上げのいつち高いは丁稚なり  
 大風の一寸糸だけ持たせられ  
 風の糸下駄に結べば走り出し  
 平然と風は電柱にひつかつり  
 奴帆ぐる／＼とぶちつ居る  
 電線に昨日の風が躍つて居  
 風高く高く地球の上にある  
 字風ぬく繪風又ぬく面白さ  
 もう森を越えて見はない奴風  
 奴風長柄の墓を下に見て  
 一人少子書生のあげた風を持ち  
 アンテナに風ひつかけて叱られる  
 血のにじむ赤ざれの手を風揚げ  
 風が出て屋根の向ふの風揚り  
 風の糸こんなこまで伸びている  
 薬瓶と並んでる風立派なり  
 病める子に風は寂し床の上  
 風揚げて居るへ手真似で書を告げ  
 風あげに寒い所へ連れ出され  
 風あげの子供は不意にみぞがあり  
 姉嬢と意見の合はぬ風をあげ  
 風の糸どうでも邪寛な穢の屋根  
 お年玉今日もかした風を買ひ  
 五六間走つた風へ見も駭け  
 黙々こごてらは風の糸をさき  
 夕飯に逃がした風をまだ云はず  
 弟に持たせて置くぬ風さなり  
 風の糸最少しほしい風さなり  
 練兵を無視したやうに風を揚げ

十紫 翠峯 翠川 翠仙 吉水 吉朗 二南 梅風 亂耽 松耶 惡源太 虛白 歌三 孤舟 青蛙 三次 秋風 幸泉 九柳 蒼梧樓 伴内 同蝶 同行 同馬 同放 同蹄

兄の風弟の風連れの風 同  
 川柳 天満支那新年句會  
 雜誌社

一月十一日午後一時から大阪市電寺町停  
 留所角智源寺で川柳展覽會を開催、同夜五時  
 より新年句會開會。

小 小 火 火  
 小火あつて不忠實なは知られたり  
 障子一枚燃へたに路次を上を下  
 小火を見た丁稚の自慢續くなり  
 まざ／＼と頭に 残る 小火の晩  
 小火で濟んだと来てくも久し振り  
 馬鹿らしい小火が工事部屋頭  
 消防の 小火さも見へぬ戻りやう  
 うらんでる隣の家は小火ですみ  
 妾宅で小火の噂を眠うき、  
 近所から見舞はれて小火恐れ入り  
 サイベルがまだ鳴つてゐる小火の跡  
 新聞で知てる小火無沙汰する  
 小火で濟んで心易さの高笑ひ  
 小火だけに近所は早く戸を締める  
 母が居る疊間中半事がすみ  
 小火の通を自轉車聲を枯すなり  
 女房が騒いで小火にしてしまひ  
 色街の小火の馴染がたんと来る  
 ごこやろなたしかこらら燃れた苦  
 小火出してから姿も少し折れ  
 消防水小火におさびかゆくなり  
 拍子水の後の小火だこ解つたり  
 小 遣 馬 行  
 折角の小遣親が取り上げる  
 素 人

小遣を渡すと悪いくせを出し  
 小遣は皆登山具に入れる趣味  
 臨時賞與小遣ひにしてさくられる  
 財布も残り少なくなつて二時  
 お詣りのお小遣にさ貯めてゐる  
 小遣ひが足らん目勝ちの年になり  
 大學を出て小遣ひに追はれて居  
 講演を小遣ひ稼ぎにやつてのけ  
 小遣ひをしらべ明日は公休日  
 小遣ひは小遣さして五圓札  
 小遣ひのむしんに寄れば雨になり  
 小遣ひの残すくなを香具師に立ち  
 小遣實ふ家を數ねるちささい指  
 五 容  
 小遣をよく呉れる叔母子なしなり  
 小遣ひをもらふこ丁稚そこにあず  
 拾圓あれば拾圓使ふことを知り  
 小遣を見せに来た兒は何か喰ひ  
 小遣をやればガマ口出して見せ  
 (人)小遣につまつた時に父さ云ひ  
 (地)凱旋へ死んだと思ふ金を遣り  
 (天)小遣をくれたの髪に結はさる  
 (軸)小遣ひは云々、二十日すぎ  
 一俵  
 炭俵へ障子邪慳にしめられる  
 何俵積んでも安いさこぼしてゐ  
 二階借炭一俵の置きごころ  
 四斗俵へ丁稚二人がやまじい  
 憤然と俵を逆に炭を手あき  
 若へ時一俵位手あき  
 女房の國から届く米俵  
 凡平 彩秋 雙葉子 十字路 佳山 靖弘 歌三 閑路 悟耶 加香 松耶 同 惡源太 素人 彩秋 蒼梧樓 舟々 武三 歌三 佳山 馬行 選紫 加香 義情 佳山 久郎 歌三



亂闘に雪跳さばし跳さばし  
爐の傍へ雪に籠つて菓を打つ  
(軸)物皆んな聲を忘れて雪に暮れ

大男(席題)

互

喜留久  
閑

大男 員席で邪覓にされ  
大男 い、處へさつかはれて  
大男 かぐんで出れば肩かうち

大男 男用 心棒に一人置き  
大男 眞用 のが嫌いにし

大男 眞用 のが嫌いにし  
大男 眞用 のが嫌いにし

川柳 糸屋町新年句會 (大阪)

一月十五日夜

川合舟々報

十五日夜天保山つた家階上に於て若悟舎、糸屋町の新年句會を開催、當夜珍しくも松耶、馬行、莢豆、刀三の四氏が出席され、句作後川柳に就ての質疑、研究、又は柳壇に對する各自の意見を交換した。

兼題「滑稽」

松耶 氏 選

滑稽な親父子供にすかれてゐ  
滑稽な事につんばも笑つてゐ  
滑稽な一人女にもて、居り

女房に嫉かれ二號に見放され  
歸る道々寧る滑稽舟々

源五 武藏坊 白嶺 毒仙

滑稽な顔を見付けた立役者  
冷はんとする敷島が動きかけ  
蝶六に五郎に笑ひ疲れてゐ  
(人)滑稽な八百屋で金を貯めて  
(地)滑稽の心算の顔をさがめられ  
(天)吠はかへされば治癒瘠せた犬

兼題「さやき」

馬行 氏 選

さやきの歸り世界が廣くなり  
さやきを女給迷惑そうに聞き  
サインドへさやく仲のよいふな

さやきを突止めに来る色男  
さやきへ銚子の變り運ばれる  
さやきの聞き取りにくい車内

さやきの一人は密柑むいてゐる  
さやきに出る衝立がこげかゝり  
さやきへハットライトが曲るな

さやきへ我子乍らも寄せつけず  
さやきから二人の眼のや場  
さやいて天井を仰ぐ馴れた、奴

さやきのあさは泣いたり笑ふも  
さやきを氣に居ればお茶が冷は  
さやきを明日問題にしてやろう

(人)さやきへ大きな聲をして  
(地)さやきの止まらぬ眼で笑ひ  
(天)さやいて笑顔になるも思

(軸)添ひ遂にさやく用もなし

席題「齒莖」

莢豆 氏 選

黙々祖母に齒莖でかんでゐる  
はれてゐる齒莖へ其人さはつて見

馬行 氏 選

これは好きなこれは嫌ひな齒莖  
齒莖からもう生へる齒が一つ見  
思ひ切つて抜くが齒莖が亦痛み  
憎い顔しては齒莖を醫者へ見え  
たのもしき齒莖に寒い吸ふ力  
戀人の齒莖に寒い寒い色  
人の好い顔に齒莖を覗かせて  
高利貸齒莖を見せて歸りけり  
(軸)親子さ齒莖にはさるを喰ひ

席題「智慧」

刀三 氏 選

友達智慧も腹立たしいやみ  
女房の智慧も案外捨てられず  
大人また子供智慧にためされる  
宿題に智慧を貸すのも親心  
またしても悪智慧が出る食ひつ  
いゝ方へ使へばさ云ふ智慧を持  
死んだ兒の智慧の話が出る七日

智慧くらへ買ふて来た方が困てゐ  
朝戻り途中に悪い智慧を借り  
いゝ智慧が浮んで髪を結びに行き  
智慧もあり度胸もあつて儲ふらず

乗り換へなごまかす智慧で乗つて  
年の暮れあるじの智慧をあぶなり  
悪智慧が中期はごして崇つて來  
智慧つけた方が近頃曳きづられ  
湯氣の立つ脂手にまだ智慧が出  
ささらまいさした策に過ぎず

(軸)その智慧へ割込んで來て

松耶 氏 選

席題「猫」

尾を空にむけて飼猫あつち行き  
 猫をまたいで戸棚まで手がこぎき  
 お妾の胸から小猫顔を出し  
 毎朝の替に小猫なぐられる  
 徹夜してゐれば猫の子泣いて来る  
 日爾ばこ時々猫の鈴が鳴り  
 段梯子猫はあこから先きへ降り  
 猫がもうキヨロくこする騒ぎ  
 送り出す間を座蒲團猫が占め  
 南天の落葉に猫は眼を覺まし  
 蒲のなく事續りなり猫の居す  
 薄暗いここで行たばに猫さはり  
 妾の手猫へ嬉しく伸びて来る  
 猫死んでから不幸のつゞく事  
 お隣りの猫追ふてると探しに来

川柳 加古川支部句會 (兵庫)

(十二月十九日)於水田鶴蓮坊居

加納嶽堂報

(題)代筆・三味線、傳家、風呂屋  
 國からの手代 代筆 知つて居り 鶴蓮坊  
 代筆を頼んで背の子を おろし 同  
 代筆に若い島田が氣にかゝり 洛陽  
 代筆を仕事の様に 食客 喜瑞坊  
 代筆さ知らずに親父見せ廻り 泰山  
 壁一重障りの三味へ腹を立て 千苦樂  
 ばちだこで夫人の身許ばれにけり 一愚  
 爪びきの春雨をさく四疊半 千苦樂

選 英豆  
 翠峯  
 翠川  
 翠葉子  
 翠源太  
 源坊  
 新水  
 歌三  
 蒼梧樓  
 赤城  
 毒仙  
 舟々  
 刀三  
 松郎  
 馬行

素人居偶會 (大阪)

松盛琴人報

戊辰の新年を迎へて昇天の日輪東海より  
 輝き渡り萬戸喜悅の裡に其第一日は暮れた  
 偶々素人居に會して水人らずに柳談に華を  
 咲かす遂に題は課せられて句成る、是本年劈  
 頭の吾等の吟である、一月元旦、

題「餅」

花嫁がお餅のよくな顔に出来  
 宵寝する夫婦二人で餅を焼き  
 餅でも焼けさ十五日過ぎ  
 餅焼いて居れば御飯がふき上り  
 四疊半餅箱いづちはばを取り  
 露路の奥あかるく餅をついてゐる  
 おもちでも焼いて話そか松の内

題「火傷」

互 選

灰色の心に三の糸がきれ  
 訖住居昔を語る三味の音  
 謹愼の息子三味線戀しがり  
 紋付へ身を切る様な風が吹き  
 頃合ひの家は家賃が少し張り  
 豆腐の家の一聲で濟む裏屋  
 貸家札近所の柄も見て暮らじ  
 お隣りの倉の白壁見て暮らじ  
 貸家も誰が居たかもきいて置き  
 終ひ風呂いづもの人によく出合ひ  
 綺麗好き風呂の開くのを門で待ち  
 流連は近所の風呂屋懸意なり

鶴蓮坊  
 泰山  
 千苦樂  
 喜瑞坊  
 喜瑞坊  
 千苦樂  
 泰山  
 鶴蓮坊

糸屋町偶會 (大阪)

一月十三日夜 於川合舟々居

題「大人」

松郎氏選

珍らしい玩具大人も仲間入り  
 野球熱大人になつてからの趣味  
 舞さらへ大人が出るさぞめかれる  
 五年生を逃げて大人に突き當り  
 寢間て聞く大人の話しおもしろし

悟郎居偶會 (大阪)

(一月元旦) 於北山悟郎居悟郎報

橙へ燈明の灯が斜に來る  
 橙の色づく頃を女逝く  
 玄關の帽子誰やら來てる夜  
 違ひに來た帽子は深ふ冠つてる  
 引つたくるやうに仲居の手に帽子  
 松の内酔ふて歸れば酔ふてゐる  
 酔ふて來た騒ぎを女將たしなめる  
 筒袖の帯がゆるんでよく遊び  
 先生に好かれ筒袖泣いてゐる

孤舟  
 十字路  
 同  
 凡平  
 凡平  
 凡平  
 凡平  
 同  
 凡平

勘當をして老眼の淋しい日  
同  
戀人さ會ふて別れて風になり  
同  
もう風に勝てない程も女なり  
開路  
老眼から嫁のアラの大きくて  
靖弘

川柳雜誌社  
加古川支部  
**忘年句會** (兵庫)

(十二月二十四日) 於ミカド食堂  
加納嶽堂報

題「掛取」  
互選

相すみと書いて横にも棒を引き  
嶽堂  
娘居て無理な負り様して歸り  
大雲  
大晦日小僧でなくて親父なり  
喜瑞坊  
病人があつて掛取氣がにぶり  
千苦樂  
若旦那同情すぎで集らす  
喜蓮坊  
掛取を息子は暗いさこへよび  
鶴蓮坊

仲人の分らぬ處一つあり  
一品  
仲人の年が二十で嫁五十  
泰山  
姑の事を仲人ほめていに  
嶽堂  
仲人へ言譯立たぬ娘もち  
喜瑞坊  
仲人にお茶出す娘ひまが入り  
鶴蓮坊  
密談を娘大畧察してゐる  
千苦樂

忘年会始めて知つたかくし藝  
喜瑞坊  
忘年会新妻故にやめておき  
泰山  
忘年会ひける妓ぎきに貰はれて  
鶴蓮坊  
忘年会女房の云ふた様になり  
大雲

**二南居小集** (神戸)

十二月廿二日 楊井二南報

慈善鍋

慈善鍋とは反對の側を行き  
小蓬  
慈善鍋其の説明は止して呉れ  
二南  
慈善鍋天の見給ふさころなり  
紋太  
慈善鍋正ちやん帽にめぐまれる  
耽  
慈善鍋第一日は暮れにけり  
同  
慈善鍋心齋橋の人が見ぬ  
同  
店番  
店番は恬淡さして錢の音  
紋太  
店番へけつたいな人道を聞き  
二南  
店番に其のお得意が氣に入らず  
同

雨

留守番は降つたらおもろいなと思ひ  
小蓬  
本降りへもう助からぬ助からぬ  
二南  
硝子戸へ雨の力が増して來る  
紋太  
一人旅雨の港へつきにけり  
同  
ラケビーへ雨も少々降つてよし  
同  
雨の日の電車を狭く乗る  
同  
黒板の半ばは雨の暗さなり  
同

賭博

普請場の暇に開いた賭博なり  
千年

賭博するさこみ静かな中に生き  
華水  
小賭博のあつちこつちへ借が出来  
紋太  
そら豆でやる八々ののどかなり  
小蓬  
ばくちうち死して後止む顔になり  
耽  
間の抜けた様に賭博負けて來る  
同  
何ぼでも來たい親分勝つてゐる  
同

雜音

雜音をおさめる様に雨が降り  
小蓬  
雜音の中に我が魂を打つ一つ  
二南  
雜音に遠く佳境を讀みつゞけ  
紋太  
鍋焼  
鍋焼が今んま歸つたさこへ出來  
華水  
鍋焼屋ヨイヨイさ持つて來る  
二南  
鍋焼隣りの賣れが氣にかゝり  
小蓬  
さほごでもなく鍋焼屋氣樂なり  
同

川柳雜誌社  
加古川支部  
**新年句會** (兵庫)  
(一月五日) 於ミカド食堂加納嶽堂報

題「紋付」  
互選

お仕度はよいかさ紋付聞きに來る  
喜瑞坊  
紋付はごう廻つたか置き忘れ  
嶽堂  
紋付も衣桁へかけさく三ヶ日  
鶴蓮坊  
紋付は江戸辯なれど地者らし  
一品  
紋付の深編笠が引かれ行く  
洛陽  
紋付をきて敷島を買ふのなり  
大雲  
紋付で來た妓大分酔ふてゐる  
千苦樂

題「初詣」  
互選

鳥居迄千鳥足なり初詣  
大雲

初詣積みはたつた一二錢 一品  
 初詣自分の御都合許りなり 泰山  
 初詣今年は皆より早く起き 洛陽  
 初詣二人が仲の願ひ事 千苦樂  
 初詣親の手前も少じあり 大雲

題「雑煮」 互 選

家出した俸を思ふ雑煮餅 喜瑞坊  
 これで皆揃ひました雑煮つぎ 大雲  
 お雑煮の数を布團の中で云ひ 千苦樂  
 在營のあの子に雑煮祝ふて置き 嶽堂  
 新嫁に雑煮の餅は大きすぎ 嶽堂  
 雑煮餅乳のむすにもつけてやり 泰山

糸屋町京都小集 (京都)

一月五日夜 桑原京郎報

京都に小集會する、遙々十三里、寒さも川柳  
 熱の前には萎縮されて、舟々、翠峯、新水三  
 君が元氣來場、柳談數時にして盡さず、漸く寒  
 夜深々さ更ける中に、作句三味に入る、殆ど時  
 解散

題「吸物」

吸物も冷めて話のあこや前 京郎  
 吸物が来たかさ飯の顔を向け 新水  
 吸物へホンに忘れた木の芽なり 同  
 吸物へ行儀正し未亡人 翠峯  
 吸物が来ても話が盡きぬなり 舟々

題「訪問」

任事着で訪へば書生の不審顔 京郎

訪問へしげし待たして新夫人 同  
 丁度よいきこへ友達訪れる 新水  
 訪れば應接室が生温くし 翠峯  
 訪問をされて書齋を片附ける 同  
 ステツキで十年前の友を訪ふ 舟々

源坊居偶會 (大阪)

(一月三日) 和田源坊報

浦島の居る頃金貨沈んです 毒仙  
 大根を浦島たべて見たくなり 舟々  
 ふだん着のまゝで浦島龜に乗り 源坊  
 翌日は乙姫ひげを剃つてやり 同

題「札束」

北風の中を札束抱いて居る 舟々  
 札束へ妾の心ひるがへり 翠峯  
 札束に慣れてポーナス少な過ぎ 同  
 百圓の束を受取る手がふるへ 源坊  
 引出しに來て札束を見て戻り 同

新年親睦會 (神戸)

一月六日夕 於十六夜茶寮 楊井二南報

開店間なしの十六夜茶寮に會を開く大阪報  
 ら萬よし氏神戸は紋太、夢遊、一狂、亂耽華水  
 莊何諸氏と私席題及兼題披露後批評吟「白」  
 に論戰を交し終つて、酒宴に移る柳談の面白  
 さに時過ぐるを忘れ十一時惜しくも散會。

年玉

年玉をれたつたゞけでも忘れ 夢遊

年玉のカレンダーだけ恙なし 華水  
 年玉へ遠慮するよな柄かいな 亂耽  
 年玉へお前ではない子供が來 同  
 年玉をやつた子供に逃げられる 同  
 年玉をせぬから預かる小抽斗 同  
 年玉は思案餘つた五十錢 萬よし  
 年玉は實こうなつた事を云ひ 同  
 年玉を内緒で貰ふ伯母があり 同  
 年玉をうつかかり母の手に渡し 二南  
 年玉を持つて抱かれてみる氣なり 同  
 あか切れの手が年玉にうれしそ 同  
 年玉へお禮を云へさ連れてくる 同

千鳥足

カーテンを覗いたゞけで千鳥足 紋太  
 千鳥足街と没交渉に行き 同  
 千鳥足女房を思ふ風が吹き 萬よし  
 千鳥足自動車なんか要らないよ 同  
 千鳥足ゆつくり來いよ見放され 同  
 千鳥足どいつこいつを懼からず 二南  
 千鳥足辻占賣をいらだたせ 同  
 千鳥足の帽子さへ邪寛なやう 同  
 千鳥足餘まり更けておらぬのに 同  
 花隈の坂 千鳥足 同  
 チャルメラへ近寄つて來る千鳥足 同  
 千鳥足屋壺クラクラさなり 同

手袋

折靴皮手袋を脱ごさせず 夢遊  
 手袋を脱ぐ挨拶は四角なり 萬よし

手袋へ面倒臭い用が出来  
辻に出て手袋のない事を知り  
手袋に二枚の紙幣を持って餘し  
手袋をどつちでもよい子にはかせ  
手袋を頬へ軽くうに思ふこそ  
冗談ぢやない手袋でぶつなんて

二南  
華水  
一狂  
紋太  
同耽

お手付のわざとらしいを見て取も  
かるた會君も入れを逃げて行き  
お手つきへ氣の毒な目が届くなり  
四五枚になつたからたへ皆躍り  
かるた會ヲオホは母の方へ向け

太選  
萬よし  
二南  
同夢  
遊

紺がすり白さ目立つ年であり  
戦鬪辭に盤面の白さ黒  
こゝろもち白く見てゐる戀心  
たゞ白い息が電車を待つてゐる  
酔ざめの水が眞つ白い茶腕  
白い波出世したのが恐くなり  
白銅の値打を子供知り始め

華水  
亂耽  
二南  
一狂  
夢遊  
萬よし  
紋太

**毒仙居偶會** (大阪)

十二月二十五日 八木毒仙報

題「浪花節」

浪花節ボンと叩けば江戸へ着き  
暫らくは客に分からぬ浪花節  
停電に出番の狂ふ浪花節  
番頭になる日も近く浪花節

翠峯  
源坊  
毒仙  
萬よし

貸切の様な氣で居る浪花節 舟々

**第十二回鼎座小集** (神戸)  
十二月二十二日夜 芳香子報

格 子 互 選

格子洗ふて正月を待つばかりなり  
手をきた格子へうなるアルドック  
大掃除 格子外したる廣さ也  
お祝日 格子へ旗を結び付け  
雨宿り 格子の内を一寸見る

初 午 互 選

初午の寒空ゆする村太鼓  
初午の轆りに小さくゞ奴  
初午の晝間 藝者ご藝者來る  
初午の鈴へ子の手がさゞきかれ  
村の子が來て初午の旗を持ち

校 長 互 選

卒業の日 校長の懐しく  
校長となつて小さな村へ來る  
校長の聲式場へ廣くなり  
校長のもう流行らないモーニング

**蒼梧舍忘年句會** (大阪)

(十二月十七日夕六時) 於村 蒼梧樓別荘

兼題「雜 煮」 庄萬よし氏選

お雑煮に本家へ揃ふにぎやかさ  
冷へきつた雑煮を前に酔ふてゐる

蒼梧樓

お雑煮がすんだ子供は唄ひ出し  
お雑煮の國の習慣まだ残り  
引張つて遣り所なし雑煮箸  
妾宅で喰ふぞ雑煮に足らぬもの  
かばかりの雑煮が餘る夫婦者  
故郷を偲ぶ雑煮の箸をさり  
(人)生國はかみびがたらしい雑煮  
(地)船員が雑煮へたらのし雑煮  
(天)やりくりの雑煮へ春がおま  
(軸)食堂の雑煮は富士ながめ

兼題「煙草」 互 選

敷鳴へ女すかさずつけに立ち  
弟の煙草やめるぞ云ひきれす  
暈ふたかき聞け煙草でさ女云ひ  
吸ひがらを主人だまつて拾ひ上げ  
歸るかと思ふさ亦も吸ひ付ける  
そんなこと知らぬ風して吸ふ煙草  
我影を見ればバットの煙り立ち  
煙草屋で聞けば分るの地圖を書き  
落籍されてからの久しい巻き煙草  
思案してゐればタバコの立ち消  
力なく立てばタバコが下にあり  
腹立ちを吸てからまでもふみにぢり  
腹がらをひらふて行くも御陵道  
いつからか煙草を父の前で吸ひ  
錢のない時ほご欲しいタバコなり  
甲子園煙草をなげて立ちあがり  
封切つて君壹本の幹事ぶり

翠峰  
惡源太  
歌三  
源坊  
狸仙  
双葉子  
新水  
武藏坊  
毒仙  
蒼梧樓  
舟々  
ひろし  
同八  
平八  
同萬よし  
同

すいがらを四五本立て、から無心  
同

席題「靴下」安井ひろし氏選

(佳)靴下をねげば親指つめがのび  
新水

(同)靴下ぞネクタイ共派手になり  
晚香

(同)氣前よく靴下を履くひざり者  
狸仙

(同)靴下の柄相應なくらし向き  
蒼梧樓

(同)靴下で履けば雪駄は横を向き  
毒仙

(同)靴下も破れば頃の切れ話  
萬よし

(同)内風呂で履けば靴下ひつかかり  
舟々

(同)靴下をはくさ漸くぬり終り  
同

(軸)毎朝のこまに靴下さがされる  
ひろし

席題「サーカス」 互

サーカスのさくも見られず出でま  
毒仙

雨の日のサーカスの内輪もめ  
萬よし

何時立つか知るサーカス越て行き  
武藏坊

仕舞まで母サーカスを見て居れず  
舟々

サーカスのロシヤ人まづい安來節  
新水

サーカスに一寸きさいいな女あり  
双葉子

呼び物が獅子に噛まれた曲馬團  
狸仙

サーカスに出来そうもない繪看板  
歌三

サーカスの鞭の響きの寒い晩  
ひろし

サーカスの娘は馬に話してゐ  
源太

人氣者馳落ちをして座がさびれ  
悪源太

サーカスが去つて淋しい町になり  
同

サーカスの前を淋しくふさころ手  
蒼梧樓

サーカスを見て悲劇なき考へる  
同

漢方醫みかんの皮も捨てさせず  
毒仙

勘定にみかんもごつてる事が知れ  
柳河樓

すころくに勝つてみかんの父も  
悪源太

正月にかへれぬみかんの島なり  
武藏坊

ふさころはみかんばかりの夢見せ  
新水

落伍者を下に眺めたみかんなり  
舟々

買はれてる方も兩手にみかんもち  
ひろし

即席のさかなにみかん出されたり  
百日紅

水菓子の中でもみかん先づさられ  
晚香

山肌はみかんの色と同じこま  
歌三

松井砂塔氏追悼句會 (大阪)

一月八日 於久成寺 愛知樂二報

若死 督之介

あれつきり別れたままで君は逝き  
將兵

床の間の君の短冊淋しさう  
同

苦死へめつきりふけた父と母  
武

死に急ぐ君さも知らず無理を云ひ  
樂二

折れたまま齧木出来ない悲しい日  
馬行

落ちつきを學びたいまに先だたれ  
同

誘はんまきて君の名に行き詰り  
同

天折へほんまかいなさやつて来る  
亂耽

天折の喙木程にうたもよめ  
萬よし

天折と思へなかつた片ふくば  
同

一月四日夜 和田源坊報

席題 紋附 源坊

紋附で出る日丁稚の返辭よし  
金星

悲しさの中に紋附いそがしい  
ひろし

紋附をたむになれて松の内  
同

紋附はおし頂いて物を受け  
山雨樓

紋附を着るさ裾から冷て来る  
同

紋附であぐらになるはいける口  
翠峯

紋附を着せるさ千供ませて見へ  
同

寫真撮るだけに紋附着せられる  
舟々

紋附でそつ々逢ふてる松の内  
同

紋附も祝辭に飽いた顔ばかり  
同

紋附で来たのが一人てれてゐる  
毒仙

紋附のまて執事は老ぼれる  
同

兼題 山雨樓

町の灯が眞下に見てから遠し  
舟々

眞黒な山駈落へついて来る  
同

(軸)立志傳山また山に生れ落ち  
山雨樓

兼題 色 選

赤くなる色さは見ぬ録の酒  
蒼梧樓

顔手な色見せて好氣に入らず  
新水

顔色を案じて里の母は去に  
毒仙

七味屋は赤い分だけまけてくれ  
源坊

産むこを怖れて赤い屋根に住み  
同

色彩にその折々を思はせる  
翠峯

なつめの實まださけやも戀なりき  
同

父死んで寫眞の色も淋しまれ  
舟々

色封筒へ軽いペン先  
同

(軸)鷺ミコゲ茶の娘すそをきり  
ひろし

兼題 新らしい 舟々

新佛らしく石塔いがんで居  
選

新らしい息子と父の中にたち  
毒仙

新らしきもう戀人へ見せに行き  
翠峯

新調の洋服で来て肩が凝り  
同

(軸)カーテン新らしく月賦住宅  
舟々

萬よし 偶會 (大阪)

一月十四日 庄 萬よし 報

題 (神 戸)

須磨の浦まだくまださ市電延び  
桶社から西へ水兵肩を組み  
波止場まで車夫の英語は馴てある  
神戸港倦まず挽ます煙を吐き

一月十六日

題 (餅つき)

實搗が表門から御用き、  
餅搗く音へ失業太い呼吸  
うすごりは母が手傳ひ兄が搗き  
實搗の後に灰だけ残される  
一白を妾隣へたのむななり  
餅搗の三味を持つのは禿げてゐる  
新世帯彼岸まで食ふ餅をつき

十二月十五日

題 (レツテル)

レツテルの同じ物なら呑ま云ひ  
レツテルを見てから層屋高く買ひ  
レツテルを取るさ進物らしくなし  
紺背を交せてレツテル派手なこま

月二會 例会 (尼崎)

十二月三日

兼題「聞き合せ」

鬚髪を聞いて雨親考へる  
聞き合せ自分もついて行つて見る

聞き合せから媒人の手にうつり  
聞き合せ隣は丁度床屋なり  
聞き合せ今日は三人来たさ云ひ  
どうしてか嫁き連れださ近所云ひ  
聞き合せに行けば綺麗な娘が居  
妹の方も序に聞き合せ  
聞き合せせわし店を開き合せ  
聞き合せ芝居の好きなき事知れ  
孝行な子に聞き合せ今日も来る

「席題」辭令

互選

辭令持つてごうごよろしく願ます  
昇給の辭令へ母も顔を出し  
辭令には不景氣でさ書いてなし  
辭令見て殺生な事しやがるな

「席題」水溜り

互選

水溜り自轉車は足上げて行き  
水溜りこんな雨が降つたのか  
水溜りへ灰まく程に世帯なれ  
女の子水溜りから引き返さ  
惱みある目に水溜りなつかしく  
むつとして出る足先へ水溜り  
酔ざめへキラリさ光る水溜り  
水溜りこの邊の子の悪い口  
水溜りまあこの子は引き寄せ  
そのあさは風にまかした水溜り  
水溜り越えてあしたは日和らし

川柳 柳柳たかせ句會報 (島根縣)  
雜誌社

一月十五日

高松線之助報

兼題 (案内)

喋 朗選

案内をされて淋しい異郷の地  
この峠越せば直ぐださ案内者  
もう一度案内をする村祭  
案内者思案の場所へ駈け戻り  
紋付に案内されて恐れ入り  
案内者拜めばみんな訃を聞き  
案内者こゝでも御神託を聞き  
案内者石段からを饒舌り出し  
案内者一人うなづく道になり  
(軸)案内に芝居氣がある廻り道

兼題 (神樂)

雷選

神樂の夜二人で契つたを思ひ  
神樂場は雛子の音が明ける  
お神樂へ團體が来てごよめかせ  
更ける夜を神樂ばかりの賑かさ  
子守唄いつか神樂の笛になり  
夜神樂の匂々へ灯の光り

席題 (藪入)

文明子選

藪入に寄つてたかつて聞きたがり  
藪入へ割箸などをつけてやり  
藪入へ母は淋しく注いでくれ  
藪入の子に食はせたいものばかり

席題 (母)

互苦路選

安産へもう父さなり母さなり  
模範生涙の下に母があり  
肩をもむ母の瘠せたを淋しがり  
繼母の眼に勘當の面白さ  
別居今日母のしなびた手を感じ  
母未だ若く英語を心得る  
堂島の懇報さ母は知らぬ也  
(軸)十人の母さ思へぬ肥りやう

## 編輯後記



年頭に際し本社並に小生宛に年賀状を頂き厚く御禮申上ます。一々御答禮を致しましたが、住所不明で郵便物誤送の爲め失禮をした向もあらうと存じますから悪しからず御許しを願ひます。雜誌は御蔭で大變好評です。今後ともよろしく御聲援を願ひます。(路郎生)

▼新年號は近來稀に見るの好實行で發行三日目には本社には一冊も本がないと云ふ盛況、川柳が社會的に認められた兆さ大いに喜んでゐる。  
▲本號は山椒式の雜誌にしたいたし努力しました、川上三太郎先生の川柳漫談タラは氏が久し振りの快心の作。西原柳雨先生の「大山みやげ」を讀みては眞面目な研究、共にどのくらゐ柳家各位を裨益する文字が分らない、「月評」は今後毎號續けられる豫

定です。此の座談會は本誌の特色たるを失はないと思ひます  
▼十二月十九日南海沿線濱守公會堂で南海至誠園學藝部の爲めに路郎先生は「川柳に就いて」小話を試み、後作句及び座談をされた。來會者は頗る熱心で且つ眞面目で研究的態度であつた。  
▼一月八日新年會後、戎橋柴藤で社友相談會を兼ねて新年宴會を開催、今後の發展策に就いて具體的に諸種の計畫を定め今後著々實行する事になつた。  
▼長野縣須坂町北澤高峰氏主催で一月二十日に川柳會を開催され非常に盛會だつたさうです。  
▼社友三笑、加香兩氏は新春早々郷里金澤へ行かれ雪の乗六公園を見て歸られた。  
▼社友水田黄彩氏は一月十五日華燭の典を舉げられた。  
▼芦穂氏は一月十六日九州、幡方面へ業務上の用事で視察の爲めに出發されました。  
▼賛助員藤本卯之助氏二男耀君十二月二十日出生、路郎先生が命名されました。  
▼ひろし君關係の中央美術社で今回「現代漫畫大觀」全六冊一冊一回を刊行、岡本一平氏編輯の

任に當り、東京漫畫會同人執筆「滑稽文學漫畫集」中古川柳及現代川柳は路郎先生が選句されしものを漫畫化されることになつて居ます。  
▼右の用件でひろし君は一月八日から十四日まで中九州方面に旅行、十二日長崎で「狸連」川柳家の歓迎を受けられたさうです、ひろし君に代つて感謝します。  
▼萬よし君は古例に依り一月元旦一家お揃ひで奈良へ遊ばれ大いに詩囊をふくらまされたさうです。  
▼龜井花童子が第六回川柳名句番附を募集されてゐます、別項廣告参照の上振つて御投稿あらん事を希望します。  
▼喜田飯山氏が青森支部を又桑原京郎氏が京都支部を幹事として活躍されることになりました。今後の發展を大いに期待して居ます。  
▼維持社友に石川双葉子、猪野燕柳、中見光路、松丘町二の四氏が新たに加はられました。  
▼路郎先生の夫人葎乃女史七年振りに丸鬚を結はれたので路郎先生が先づ吃驚され、訪問者は

皆なん何處の人やろ。  
▼廣島の露斗君は川柳雜誌の爲めに絶へず御援助下され、取次販賣を絶つて居ました。一月廿九日主家が火災に罹り川柳雜誌の合本を焼かれ非常に惜まれて居ます。  
▼一月十一日日本社天満支部主催の下に智源寺で開催された川柳展覽會には色紙短冊三百數十點寫眞三十點新古参考書約百點新舊柳誌約五十點點柳書遺品漫物十數點、川柳家宣言書、川柳家取組番附、川柳家點取番附等六百數點が出陳され非常に盛況でありました。  
▼井上凡平君は、本社創立以來から使用して居る句箋を御寄贈下さつて居ます、本社はその爲めにどのくらゐ助かつて居るかも知れませんが、此際厚く感謝します。

## 改號と轉居

木村芳香子君は北柳と改號  
▲木村半文錢氏は大阪市西成區粉濱西之町三丁目三一へ移轉  
▲小西兔絲子氏は金澤市淺野川上川除町七三〇三へ轉居(革郎生)

投稿規定

▼句幅は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼縮切は嚴守されたい。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこと。

募 集

第五卷第四號課題

二月五日締切。

▼卒業

▼ゴム靴

▼大入

第五卷第五號課題

三月五日締切。

▼嘘

▼藏

▼釣鐘

每號募集

▼近作柳傳(廿句迄) 麻生路郎選

▼古句質疑(三句迄) 蛭子省二擔當

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に願ひます

定 價

普通號 一部 金參拾錢  
新春特輯號 一部 金五拾錢  
八月特輯號 一部 金四拾錢  
半箇年前金(特輯號共) 壹圓八拾錢  
壹箇年前金(特輯號共) 參圓六拾錢

廣 告

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御通知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指す願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年 一月廿五日印刷  
昭和三年 二月 一日發行  
第五卷第一號 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一 郎  
發行所 大阪市西成區千本通五丁目七番地  
大阪市西成區千本通五丁目七番地  
川柳雜誌社  
振替大阪三一五二四番

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣 店  
大阪) 大賣捌 サクラヤ書房 其他市内各書店  
(東京仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、後藤 (函館) 石塚  
(廣島新天地) 山口 (石川縣小松) マコト屋 (京都 書藝堂)

# 川柳雜誌社關係の人々

(いろは順)

賛助員

客員

末弘 嚴太郎

池澤樂居 大田弘雄 岡本一平 岡直方 片岡純二 嘉納辰二 田中香涯 長崎秀三 野柳三郎 國枝史郎 藤井之助 藤井不助 小酒井清司 赤井清司

小出 樽重 木村 半文 柴谷 柴舟 篠原 春雨 蛭子 省二 森東 魚 河 南放馬 龜井 花童子 高橋 かほる 高見 柳骨 竹内 多聞 矢田 右大臣 松本 助六 松盛 琴人 酒井 飯山人 喜飯 山郎 北山 萬よし 庄 萬よし 柳 野燕

## 特別社友

## 維持社友

石川 双葉子 長谷川 徹 畑田 炭車 堀内 靜雲 本田 柳一路 尾添 雷相 高橋 綠郎 辻左 馬 中澤 濁水 中見 光路 桑原 文郎 桑島 文郎 柳川 洲馬 安西 杏馬 松丘 三馬 越村 加香 朝田 新水 水田 黃彩 水谷 鮎美 宮本 銀砂子 嶋田 翠峯 檜山 千代二

## 編輯局

(特別社友)

橋本 二柳子 藤里 藤園 藤生 葎乃 三好 葎乃 安井 ひろし 主幹 麻生 路郎

大坂市南區新我橋南詰

道頓堀支部 幹事 庄 萬よし

大坂市北 北森町三十二 天滿支部 幹事 北山 悟郎

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七 濱寺支部 幹事 太田 朝陽

神戸湊町一丁目電氣局西 神戸支部 幹事 庄 萬よし

山口縣山口町石原小路 山口支部 幹事 柳川 洲馬

東京市芝愛宕町一ノ六大成社内 東京支部 幹事 岩崎 柳路

函館市青柳町五〇 函館支部 幹事 龜井 花童子

大坂市住吉區安立町五丁目 大坂支部 幹事 德田 双柳

住吉支部 幹事 德田 双柳

朝鮮仁川仲町一丁目八

仁川支部 幹事 矢田 右大臣

松江市雜賀町 松江支部 幹事 奈其 井仙坊

石川縣輪島町風至上町 石川支部 幹事 桑島 文絲

石川縣小松町猫橋詰 小松支部 幹事 本田 柳一路

高知市本與力町 高知支部 幹事 中澤 濁水

大阪府西淀川區姫島町五二一 大阪支部 幹事 横田 眠聲

大阪府外阪急沿線刀根山療養所内 大阪支部 幹事 安西 杏三

金澤支部 幹事 宮本 銀砂子

金澤市榮町 金澤支部 幹事 宮本 銀砂子

大坂市東區糸屋町二丁目七

糸屋町支部 幹事 川合 舟々

和歌山縣田邊町幽靈松下 田邊支部 幹事 辻 左馬

島根縣簸川郡高松村 簸川支部 幹事 尾添 雷相

豐橋支部 幹事 旭町 高橋 綠郎

神奈川縣平塚町旭座前 神奈川支部 幹事 酒井 駒人

兵庫縣加古川町大川町 加古川支部 幹事 水田 黃彩

青森市古川町美法二七 青森支部 幹事 喜田 飯山

京都市七條大宮東入 京都支部 幹事 桑原 京郎

京都支部 幹事 桑原 京郎

## 讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することゝは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝにあればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路耶生)

## 古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

## 桃太郎の研究

洋裝美本 全一冊

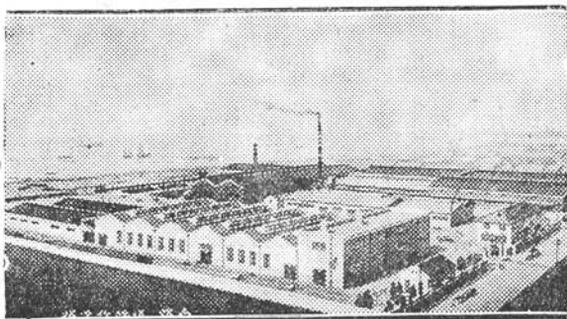
定價 五十錢 郵税 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番



(新築工場全景)

# 「白鶴通信」

東洋一の清酒場詰工場

天下に冠絶せる、清酒白鶴愛飲家各位の多大なる御愛顧によつて、他の追従をゆるさざる模範的清酒場詰工場の竣工せし事を茲に御披露すると同時に感謝の意を表する次第であります。

同工場は二ヶ年の時日、工費五十萬圓を費し昨年四月參拾日竣工致しました。新工場は全部電力により、連續的自動場詰機によつて、理想且つ衛生的に製品せらるゝが故に最も安全に飲用する事が得られます。製品能力は従來に比し數倍致しましたので倍舊の御愛顧に依て尙ほ一層發展致したいのであります。

昭和三年二月

灘御影町

嘉納合名會社敬白



# ドール印貝



映畫劇 盛

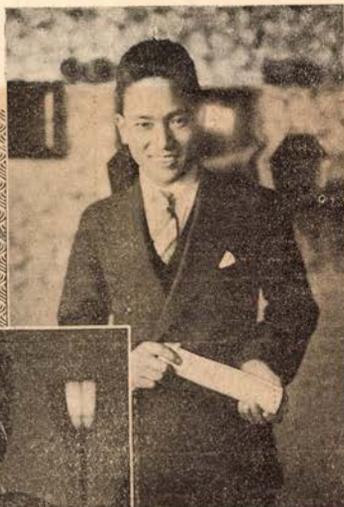
綱 (三枚)

月形龍之介主演映畫

吹込室で

解説 笹木溪雪  
音楽指揮 阿部芳越

月形龍之介



盛綱 月形龍之介

會商器音著外内 社會資合  
町津今線沿神阪

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)  
昭和三年一月二十五日印刷 昭和三年二月一日發行

川柳雜誌

(第四十九號)

金三拾錢